藤　沢　窯　跡

――長野県上高井郡高山村
藤沢窯跡発掘調査報告書――

1985

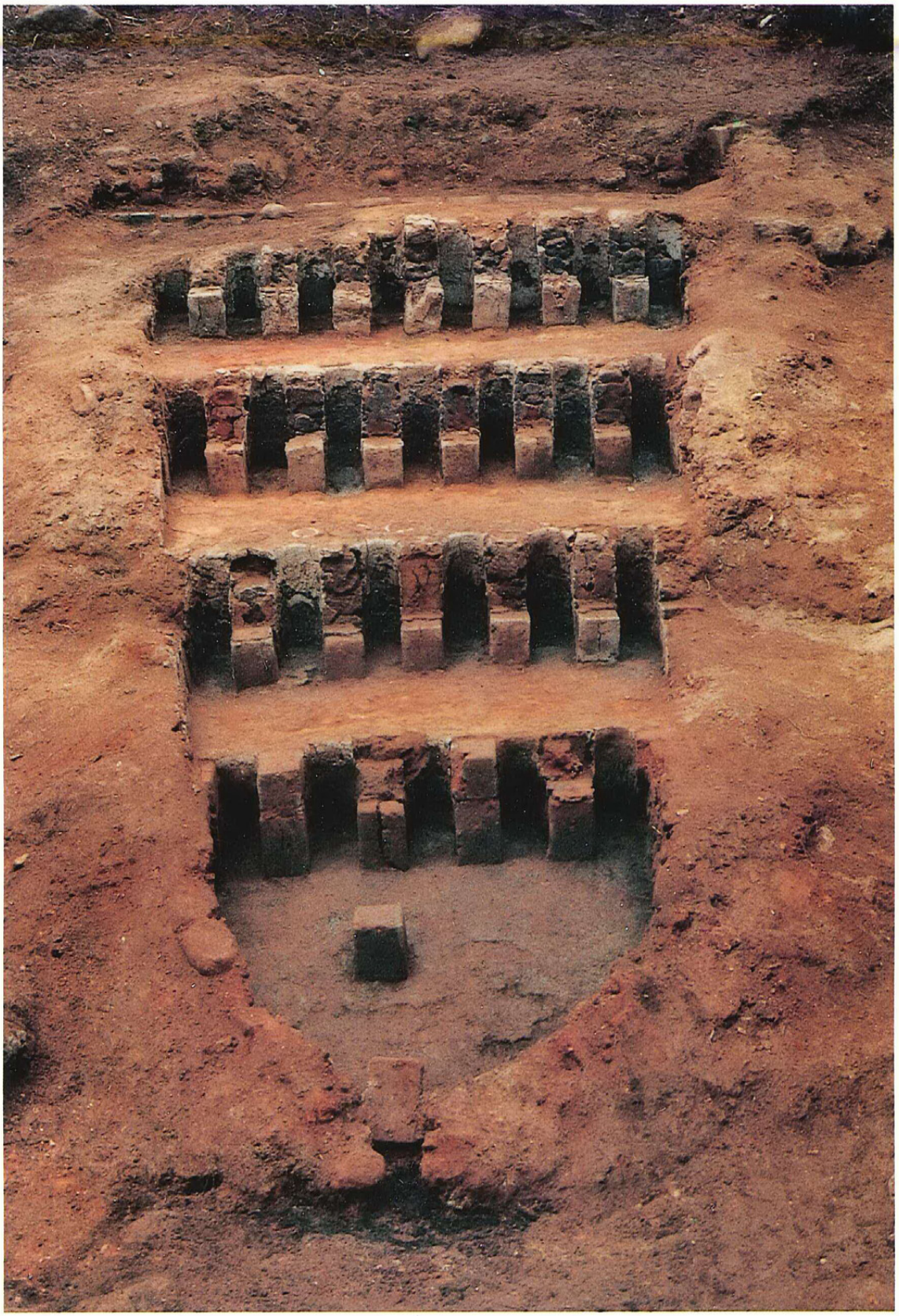
上高井郡高山村教育委員会

藤　沢　窯　跡

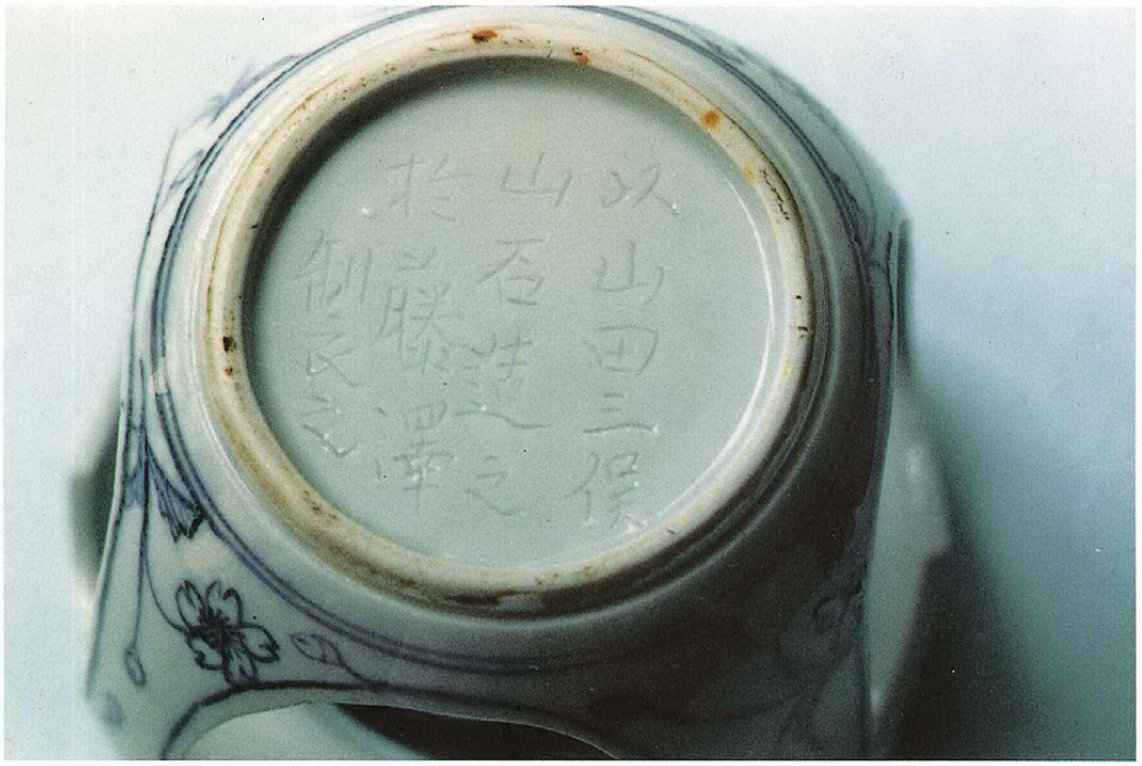
――長野県上高井郡高山村
藤沢窯跡発掘調査報告書――

1985

上高井郡高山村教育委員会



藤沢窯跡全景



藤沢焼伝世盃台

上　盃台底部銘「山田ノ三俣ノ山石ヲ以ッテ之ヲ造リ藤沢ニ於テ之ヲ製ス」

下　盃　台

牧　和彦氏蔵

序

このたびここに発掘調査報告書を刊行することになりました藤沢焼窯跡は、昭和51年に本村宮村在住の松本孝夫・松本信義両氏により発見されました。藤沢焼の調査研究はその後両氏を中心に進められ、昭和55年には高山村教育委員会が主体になり、永峯光一、関孝一、小林重義各氏のご指導を得て、発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果によりますと、この窯跡は縦狭間式連房登窯とよばれる末広がりの数少ない形式に属すとのことですが、江戸時代の磁器専用登窯が完全な姿で残っている例は全国にも珍らしく、大変貴重なものであると指摘されました。

また、ここで焼いた磁器の原料は、他所からもってきたものではなく、本村奥山田に産する三俣石と、山田温泉下の池の平(いけんてら)で採掘した白土を利用しており、特に注目されます。郷土の資源に着目した先人の偉業がしのばれるとともに、村民の１人として、そのパイオニア的精神に深く学ぶものがあると思いました。

この藤沢焼窯跡は本村にとって重要な文化財であり、後世に永く伝えられるべきものであることはいうまでもありません。幸い、土地所有者である藤沢市郎氏の深いご理解を得て、発掘後は損傷のないように埋め戻し、永久保存をはかることができました。また、出土品や調査の記録は、高山村歴史民俗資料館に展示し、活用を進めているところです。

本書を刊行するにあたり、窯跡の発見以来、長期にわたりご指導とご協力をいただきました関係各位に、心から感謝の意を表すとともに、この報告書が今後の文化財保護と研究に資すれば幸いと思います。

昭和60年３月20日

上高井郡高山村教育委員会

例　　言

1、本書は長野県上高井郡高山村大字奥山田字関場の藤沢地籍に所在する藤沢窯跡の学術発掘調査報告書である。

2、本調査報告書は、発掘調査の結果報告の他に、村教育委員会が今まで松本信義氏に委託してきた調査研究の成果も加えてまとめたものである。

3、本調査報告書の図版は、各々の執筆分担者が中心になって作成したが、中でも、小林重義氏をはじめとする東北新幹線赤羽地区遺跡調査会の方々に負うところが多かった。

4、本調査報告書の原稿は下記のとおり分担執筆した。

第1章　調査の経過（松本信義）

第2章　藤沢窯跡の立地と関連遺跡（松本信義）

第3章　藤沢窯の構造と出土遺物

第1節　藤沢窯の構造（村松　篤）

第2節　出土遺物（小林重義）

第4章　藤沢焼の工程と三俣石（松本信義）

第5章　藤沢焼の歴史的背景（松本信義）

結　語　（関孝一）

5、本調査報告書の編集は関孝一が中心になり、発掘調査団が行った。

6、本調査に関するすべての資料は高山村教育委員会ならびに高山村歴史民俗資料館が保管している。

7、本調査のために、下記の方々ならびに諸機関からご指導とご協力をいただいた。深く感謝の意を表す次第である。

安藤　裕・今井静夫・荻原恒雄・吉向松月・黒岩　博・島田春生・竹内一徳・仲野泰裕・永見鴻人・藤沢市郎・松本孝夫・芳村俊一・綿田弘実・高山村公民館宮関分館・東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・長野工業試験所・丸子町郷土博物館

目　　次

序
例　　言

第１章　調査の経過……1
　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1
　第２節　発掘調査の経過……2
　第３節　発掘調査後の経過……4
第２章　藤沢窯跡の立地と関連遺跡……5
　第１節　藤沢窯跡の立地……5
　第２節　藤沢窯跡の関連遺跡……8
第３章　藤沢窯の構造と出土遺物……11
　第１節　藤沢窯の構造……11
　第２節　出土遺物……14
第４章　藤沢焼の工程と三俣石……28
　第１節　藤沢焼の工程……28
　第２節　三俣石の成分分析と焼成実験……29
第５章　藤沢焼の歴史的背景……30
結　　語……33

（参考文献）

挿　図　目　次

第１図　遺跡附近地図（１：3000）
第２図　窯跡周辺全体測量図
第３図　窯跡附近鳥瞰図
第４図　関連遺跡分布図（１：50000）
第５図　藤沢窯跡実測図
第６図　窯跡断面図
第７図　急須・土瓶実測図
第８図　蓋実測図
第９図　皿実測図
第10図　皿・花器・壺実測図
第11図　碗実測図
第12図　盃・壺等実測図
第13図　窯道具実測図
第14図　テストピース実験図

表　目　次

藤沢窯出土遺物観察表
三俣石成分分析表

史　料　目　次

史料１　奥山田区有文書
史料２　藤沢龍右衛門家系図

図　版　目　次

巻頭グラビア　１、藤沢窯跡全景
２、藤沢焼伝世盃台

ＰＬ１　全景（対岸から）
ＰＬ２　1、旧藤沢橋（吊橋）
2、松尾社祠
ＰＬ３　1、発掘前の窯跡
2、窯跡全景
ＰＬ４　1、灰原
2、胴木の間
ＰＬ５　1、窯の縦狭間
2、第１焼成室
ＰＬ６　1、第２焼成室
2、第３焼成室
ＰＬ７　1、第４焼成室
2、第５焼成室
ＰＬ８　発掘スナップ
ＰＬ９　急須・土瓶
ＰＬ10　蓋
ＰＬ11　皿
ＰＬ12　皿
ＰＬ13　鉢
ＰＬ14　碗・花器
ＰＬ15　盃・壺
ＰＬ16　窯道具
ＰＬ17　窯道具
ＰＬ18　窯道具
ＰＬ19　窯道具附着状態

第１章　調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経過

上高井郡高山村や須坂市に、藤沢焼銘のある呉須染付の磁器が伝世品として所蔵されていることは、以前から識者の間で知られ、関心がもたれていた。しかし、この焼物がどこで焼かれたのか全く不明で、窯跡や関係文書も発見されないまま、漠然と高山村のどこかで焼かれたのであろうと推測され、「幻の焼物」といわれてきた。

昭和51年５月２日になって、以前から藤沢焼の調査研究を続けてきた高山村宮村在住の松本孝夫氏と筆者は、窯跡の推定地とされる高山村大字奥山田字関場の藤沢地籍を踏査し、試掘した結果、そこが窯跡の所在地であることをつきとめた。この発見により、高山村教育委員会は文化庁へ遺跡発見通知書を提出し、地元の高山村公民館宮関分館に窯跡の管理を依頼した。また、筆者には藤沢焼についての調査が委託された。委託された調査事項は、窯跡の関連遺跡所在調査、聞き取り調査、関係文書の調査、原料産出地の調査、原料分析と焼成実験、伝世品の調査等、多岐にわたるものであった。この調査は昭和52年度から58年度まで継続して行われたが、そのうち、発掘調査前の経過は次のとおりである。

〈昭和52年度〉

５月１日（日）　聞き取り調査と奥山田区有文書をもとに、荻原恒雄・島田春生・田中政義・松本孝夫・松本健義・山崎正光の６氏とともに、高山村奥山田の三俣地籍を踏査し、藤沢焼原料の陶石（ダイアスボア）採掘地を発見した。

７月９日（土）　須坂市春木町在住の牧和彦氏所蔵の盃台を調査し、器底の銘文により、三俣石が藤沢焼の原料であることを確認した。

７月10日（日）　高山村牧の黒岩浅人・黒岩利男両氏宅を訪ね、慶応２年丙寅４月16日に、高山村山田温泉下の松川の段丘上にあった池の平（いけんてら）で、白土採掘中、雪解け水による山崩れで遭難したという２人の人物について調査した。この結果、池の平の白土は三俣石の石粉に混入する原料であることが判明した。また、慶応２年頃は盛んに磁器を製造していたことがうかがわれた。

〈昭和53年度〉

10月２日（月）　大阪在住の７代吉向松月父子を藤沢窯跡に案内したところ、磁器窯として発掘調査をする価値が十分あること、池の平の白土は蛙目粘土に近い性質をもったものであろうという教示をうけた。

〈昭和54年度〉

７月18日（火）　長野県工業試験所へ三俣石と藤沢焼磁器片の比較分析を依頼した。

8月27日（日）　永見鴻人氏に三俣石粉で試作したぐいのみ6個を持参し、焼成実験を依頼した。

〈昭和55年度〉

5月29日（木）　永見氏を訪ね、焼成実験の結果を聞いた。また、高山村教育委員会に窯跡の発掘調査を早く実施するよう陳情した。

6月5日（木）　田中政義高山村教育長から関孝一氏に発掘調査の相談があり、発掘計画が検討された。

6月28日（土）　高山村教育委員会は藤沢焼窯跡の発掘に先立ち、土地所有者の藤沢市郎氏に発掘の承諾を得て、文化庁に埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

第2節　発掘調査の経過

発掘調査は昭和55年7月29日から8月4日までの7日間とし、次のとおり発掘調査団が構成された。

発掘調査の主体者　　高山村教育委員会教育長田中政義

発掘調査担当者　　永峯光一

発掘調査団長　　関孝一

発掘調査主任　　小林重義

発掘調査員　　村松篤　松本孝夫　松本信義　村上押二　山崎正光

発掘調査参加者　　畔上年治　内山幸太郎　臼田正次　小渕久男　片桐貢　片桐英一郎　片桐真一　片桐昭　片桐とめ子　片桐よつい　黒岩博　黒岩一実　黒岩太郎　久保田久三　小山義雄　小林猛　小出定男　篠原政男　篠原保夫　島田茂正　渋谷龍治　滝沢田助　梨本義雄　中沢肇　平林春太郎　藤沢音市　藤沢芳蔵　藤沢恵一　藤沢酉男　藤沢好正　藤沢七作　藤沢善一　藤沢勝実　藤沢修　藤沢千勝　藤沢武雄　藤沢一実　藤沢正　藤沢憲蔵　松本利輔　松本小市　松本竹夫　松本博　松本初男　水橋喜市郎　毛利義二　山崎保雄　山崎猛　山崎信治　涌井忠一　涌永啓次郎　高山中学生39名　高山小学生5名

発掘調査事務局　　宮崎今朝夫　臼田文男

発掘調査期間中は好天に恵まれ、炎署のもとで延べ約200人に近い人達が、自発的に参加して行われた。発掘調査の経過は次のとおりである。

7月28日（月）　湯倉洞窟の発掘調査と併行したため、宿舎に近い窯跡の現場で調査団の最終打合せを行った。

7月29日（火）　窯跡周辺の測量及び写真撮影をし、発掘の準備を行った。

7月30日（水）　雑草等を除去し、表土はぎを行った。出土遺物はなかった。

7月3日（木）　発掘参加者36名、試掘段階で確認されていた地点を中心に、上下に発掘を

進めた。地下40cm～80cm掘り下げたところ、窯天井、温座、焼壁の崩落が層をなして出土した。大小の小判形レンガとその間層をなす粘土は焼けて赤化し、窯床や縦狭間を覆っていた。焼成室は３段発掘されたが、その床面は粘土が堅く焼きしまり、橙色をなしていた。縦狭間も赤黒色に焼きしまり、灰がとけて輝いていた。出土遺物は大小のレンガとサヤが大部分で、りんご箱にして約50箱あった。磁器破片も少量出土した。

８月１日（金）　発掘参加者40名、今日の発掘で窯体の輪郭がはっきり現われた。窯体は扇状に上部に広がる縦狭間式連房登窯で、平面の全長は約7.2ｍ、最大幅は第４焼成室上部で約4.1ｍあった。また、各焼成室間の段差をなす狭間壁の高さは約48cmあり、狭間穴の直径は約20cmあった。出土遺物は昨日と同じく、レンガとサヤが中心で、りんご箱にして約35箱あり、磁器片も少量出土した。

８月２日（土）　発掘参加者36名、窯の焚き口にあたる胴木の間と窯前の灰原を中心に発掘を進めた。灰原からは多量のサヤ、ニギリ、ドチ、レンガ、茶碗、皿、急須等が出土した。りんご箱にして約30箱にのぼった。夕刻、高山村宮村に所在する沖右衛門窯跡を小林重義氏らと踏査し、附近出土のツク、タナイタ、サヤ等の窯道具を調べた。

８月３日（日）　発掘参加者24名、窯前の右側から、長野市大門町通りの「ふじきそば店」が発注したと思われる「ふじき　名物戸隠そば　即席御料理」等の銘がある盃やそば用器破片が発掘された。このことから、藤沢焼磁器の販路が善光寺附近にまで及んでいたことが判明した。また、灰原の前方、胴木の間から約９ｍ南の地点は松川の断崖になり、ここからは磁器の破片とサヤが多量に発見された。灰原に捨てきれない焼き損じをこの断崖に捨てたものと思われる。本日をもって発掘調査は完了した。出土遺物はりんご箱にして約25箱あった。

なお、この日、陶芸家の吉向松月氏を再び招き、窯跡と出土遺物について所見を聞いた。その要旨は次のとおりである。

１、窯周囲の焼け広がりと、赤黒く焼けただれた狭間の様子から、藤沢窯は年に１回ないし２回焼いたとして、６～８年間は使用したであろう。また、１回の焼成に約800個から1000個の作品を焼いたと思われるが、焼成温度は、松薪や楢薪を約1000束使い、昼夜兼行で数日間焚き続け、磁器焼成に必要な1300度近い温度にしたと考えられる。

２、窯形式は焼成室が通常３ないし５の奇数であるべきだが、藤沢窯は４の偶数であるのがおかしい。捨て窯なりがもう一段あるべきだ。

３、末広がり型の珍らしい窯形式であると同時に、江戸時代の磁器専用登窯としてこれ程窯体に損傷がなく、完全な姿で保存されている例は全国的にも珍らしく、貴重である。また、窯跡の保存については、寒冷地であることを十分考慮し、早急に対処する必要がある。

４、藤沢窯構築の直接の要因は、良質な三俣石が地元に発見されたことによるものといえるが、出土した磁器破片をみる限り、ロクロ技術、絵付、焼き締め等、古伊間里焼や清水焼に見劣りしない。

8月4日（月）　発掘した窯跡にシートをかける作業を行った。また、併行して窯跡の上部を調査したところ、吉向氏の指摘どおり、もう1段遺構が存在していた。この遺構は後日補充調査することになった。出土遺物の総数はりんご箱にして約140箱にものぼった。とりあえず、旧奥山田小学校体育館に運搬して収納した。吉向氏の講演「藤沢焼と焼物について」が高山村公民館ホールで開催された。

第3節　発掘調査後の経過

全国的に珍らしいとされた藤沢窯は、冬季を前にして早急に保存する必要があった。そこで、筆者は岐阜県土岐市や愛知県多治見市方面の先進地を視察し、当面、盛土保存が最適であるとの結論を得た。

11月23日、土地所有者の同意を得て、約40名が参加し、次のように盛土保存を実施した。

1、10cm毎の目盛を入れた長さ60cmのビニール管を赤青用意し、窯跡の中央には赤、両側には青のビニール管をそれぞれ一列にして立て、盛土後も窯跡の位置が識別できるようにした。

2、盛土は、まず、発掘の際に出た焼土を、約1cmの厚さで窯跡全面に覆土した。その上に、木炭の細片を15～20cmの厚さで覆った。木炭は吸水性や保温性に富み、寒冷地の保存に最適であるばかりでなく、永久に腐食変質せず、微生物やモグラ、ネズミなどの侵入を防ぎ、窯跡の再発掘が容易であるという利点をもっているためである。この木炭の上に、有機質を全く含まない赤土を約40cmの厚さで覆土した。

3、最後に、盛土した上にシートをかけ、窯体の周囲に排水溝をめぐらした。

窯跡の盛土保存が完了した後、昭和57年6月18日に補充調査の打合せが行われ、7月28日に発掘調査が実施された。まず、表土から40～70cm掘り下げたところ、前回調査した第4焼成室上部から約1.40cm上奥部に、窯の基底をなすレンガが一列に並んで出土した。横幅は約4.30mあり、窯の最大幅をなし、最上部の向って左寄りに、煙出し部分が2個検出された。この煙突跡は地面にあることから、第5房は「すて窯」として利用されたことも考えられた。出土遺物は全くなかったが、窯体の東段上部分でサヤと磁器の破片が多数発見され、特に前回でも発見された「ふじきそば店」銘入りの盃片が数個発見され、注目された。

補充調査が完了した後も、藤沢焼に関する調査研究は続けられた。昭和57年9月26日、高山村水中に所在する藤沢焼陶工湯本角蔵の旧宅跡を調査し、角蔵が水中に築いたと伝えられる窯跡を調べたが、何の手懸りも得られなかった。続いて12月6日には、下高井郡山ノ内町渋温泉の山口則高氏宅で、児玉果亭が高山村で絵付をしたという盃を1個発見した。また、昭和58年2月10日には、高山村荒井原の山崎茂氏宅で、湯本角蔵が水中で明治時代に焼いたと伝える水中焼火鉢を1個発見し、高山村高杜神社所蔵の火鉢1個も同じものであることを確認した。

出土遺物の整理作業は発掘調査後に多少行われてきたが、本格的に始まったのは昭和59年8

月以降であった。高山村歴史民俗資料館に遺物の収納が可能になり、７月24日、27日、30日、31日の４日間を費して、旧奥山田小学校体育館から遺物を移転するとともに、遺物の水洗と選別を行った。さらに、８月25日と26日の２日間で、小林重義氏を中心に考古学研究者を動員し、磁器の分類、接合、写真撮影を行った。実測図等は時間的に限界があり、東京へ持帰って作成することになった。

整理作業の参加者は次のとおりである。

石井明憲・猪又まゆみ・大谷　猛・小林重義・鈴木一郎・高谷英一・田中和之・徳永俊夫・原田大介・村松　篤・森本智子

なお、発掘調査報告書の作成については、すでに昭和57年６月18日に、補充調査の打合せと併行して検討された。その際、窯跡周辺に所在するとされる「土練り場」・「ロクロ引き場」・「絵付場」・「窯祭神跡」、あるいは藤沢窯と関連がある高山村宮村の「沖右衛門窯」、高山村久保の「勝山健雄氏宅庭前の窯跡」等が未調査の段階であり、現段階で報告書を作成するのはどうかという意見がだされた。しかし、藤沢窯跡に関連する総合的な調査は今後の課題とし、今回の発掘調査と、現段階までの調査研究の結果をまとめることになった。

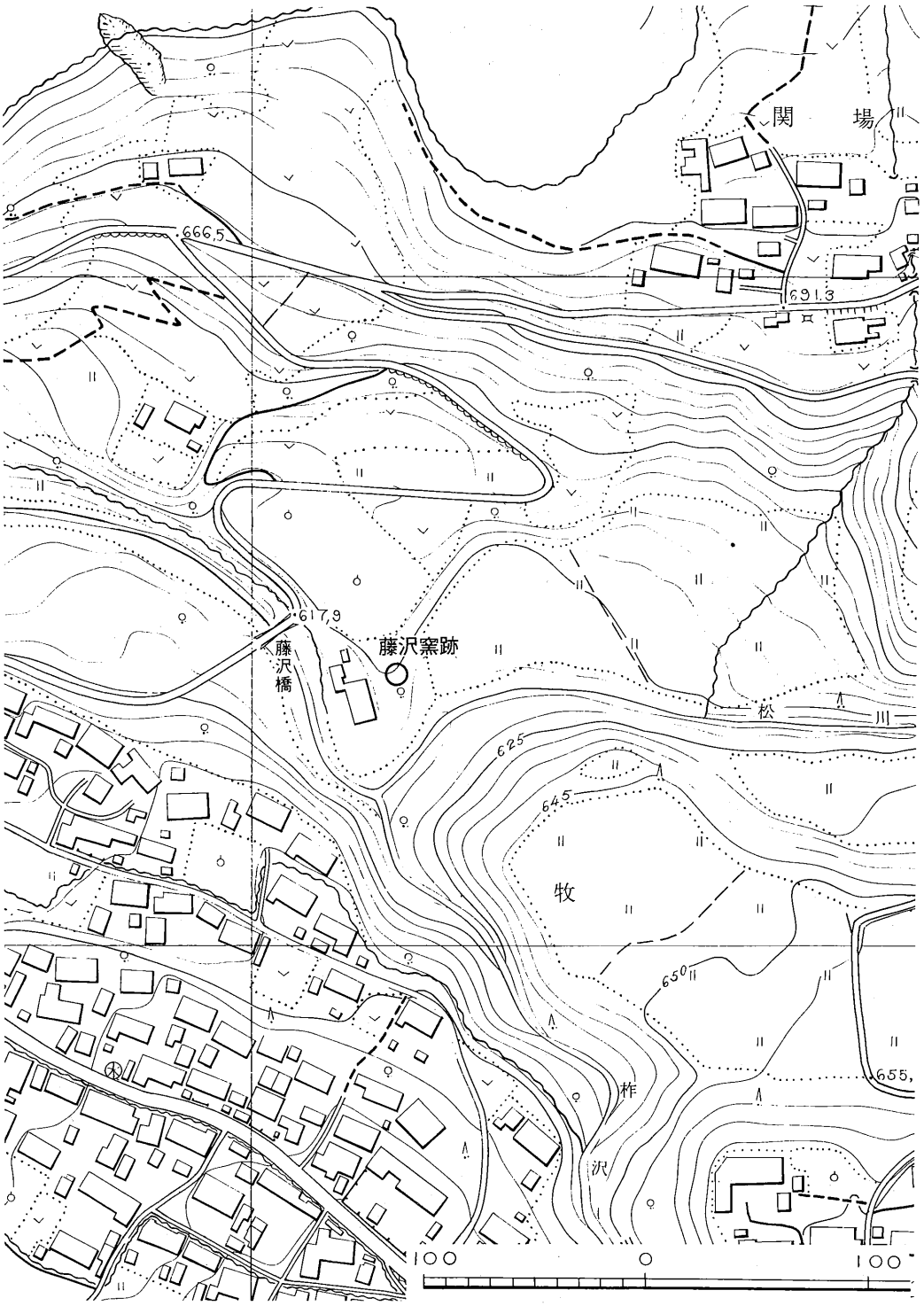
第２章　藤沢窯跡の立地と関連遺跡

第１節　藤沢窯跡の立地

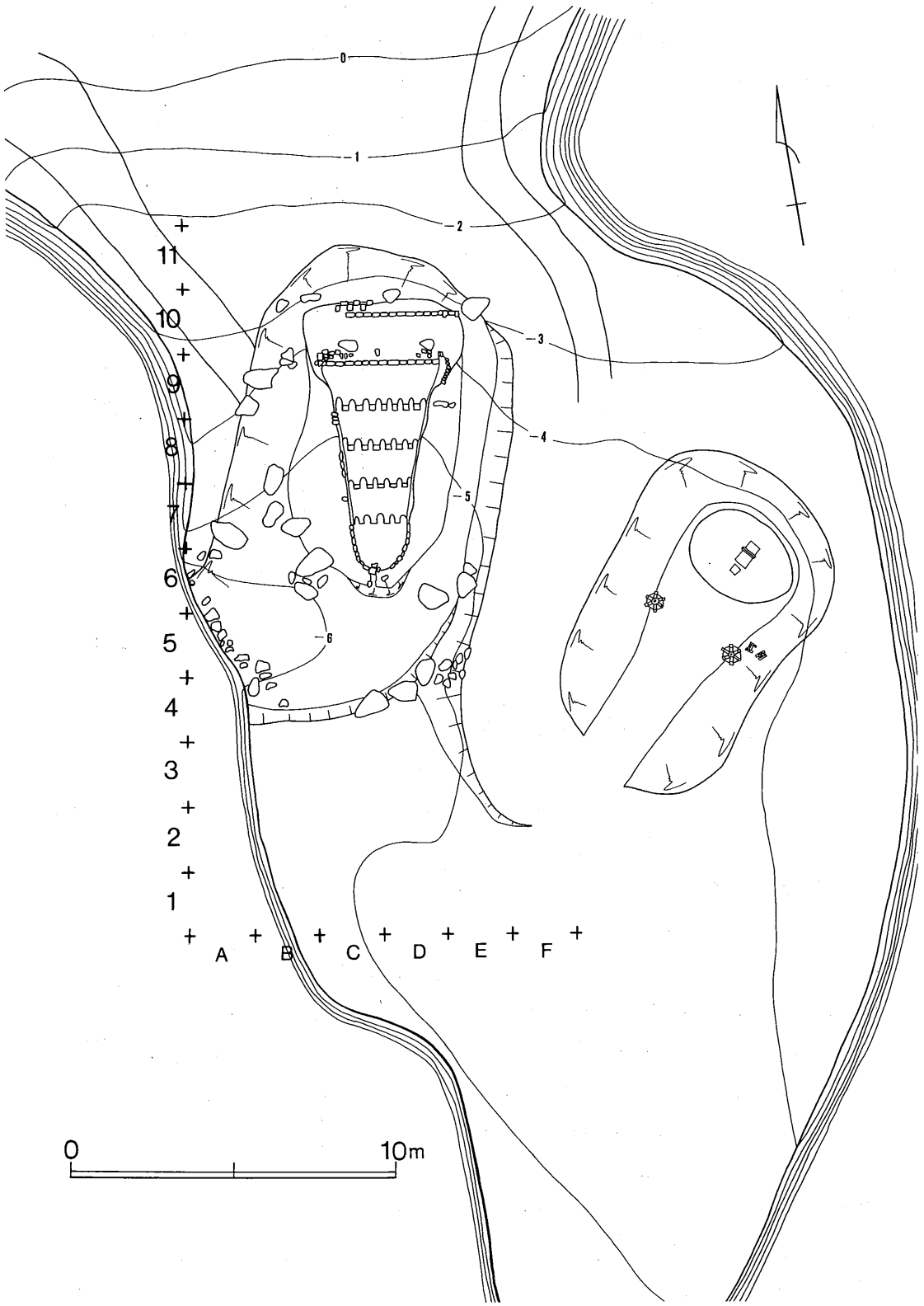
藤沢窯跡は長野県上高井郡高山村字関場の藤沢に所在する。ここは松川の右岸にあたり、現河床から約10m 高い段丘縁に近く、半島状に張出した台地斜面を 14.5m×８m の範囲で、約１.5ｍ掘り下げ、その窪地状地形の中に窯を築いている。この辺は南斜面のため日当りがよく、松川の上昇気流による川風を受けて乾燥し、築窯にとっては好条件をそなえていたといえる。なお、この地方の気候は山間部のため、全般に風が穏やかで、冬季の積雪は50～70cmと多いが、寒気はゆるやかで、夏の暑さも最高気温が28～29℃と比較的しのぎやすい環境である。

ところで、窯跡周辺の状況をみると、まず東側は、窯跡に隣接して松尾神社の祠があり、藤田屋酒造の祭神が祀られている。その東側の下段は、松川の旧河床を利用した水田が棚田状に小さく並んでいる。

窯跡の南側は、昭和57年６月に取り壊されて今はないが、段丘崖の下に、文化14年から昭和18年まで営まれた旧藤田屋酒造舗「藤乃川」の水車小屋、酒倉、酒小売店、住居等が並んでいた。後述の藤沢龍右衛門の生家でもあった。この松川の水を利用した水車動力は、酒造ばかりではなく、藤沢焼原料の三俣石を粉砕することにも利用されており、窯業に欠かせない立地条件の１つであった。松川の渓谷を隔てた対岸の段丘上は、高山村大字牧の集落がひらけているが、この牧集落を結ぶ唯一の橋が藤沢橋である。牧の鈍原から清水坂を下り、旧道は吊り橋の旧藤



第１図　遺跡附近地図（１：3,000）



第 2 図　窯跡周辺全体測量図

沢橋（昭和３年竣工）を渡って藤田屋脇を通り、窯跡の上側にでたが、昭和46年に現在のコンクリート橋ができ、窯跡のはるか西側を迂回して平塩山の急斜面を登り、主要地方道豊野南志賀公園線に接続している。この間の通路を「藤沢線」というが、藤沢窯跡の地点は、牧と奥山田を結ぶ交通の要地にあたり、原料の三俣石や池の平の白土を運搬してくるのに好都合の場所であった。

一方、松川の下流にあたる西側は、松川に迫る十二崖を越えて、遠く松川の扇状地と善光寺平を望むことができる。藤沢焼製品の販路が及んだ地域である。

また、窯跡から北側の奥山田一帯にかけては、広大な山林地帯が広がり、窯焚き用の薪が容易に得やすい条件を有していた。

このように、藤沢窯の立地条件をみてくると、基本的には三俣石の原料立地型を示しているが、その他の諸条件も、この山間地にあって少なからずみたしているのである。これらに資本力と技術が投入されたとき、藤沢焼が成立するのである。

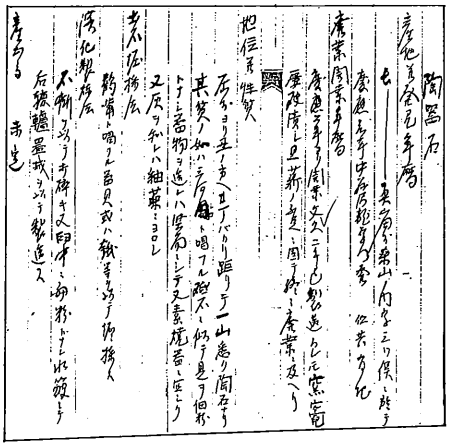
第３図　窯跡附近鳥瞰図

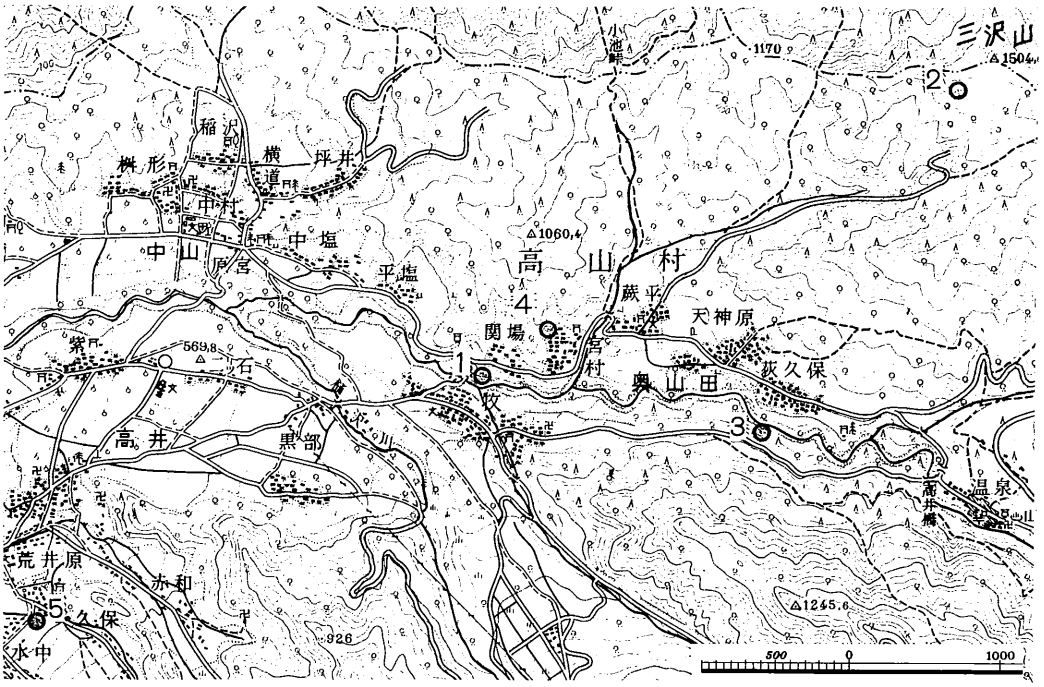
第２節　藤沢窯跡の関連遺跡

藤沢窯との関連遺跡としては、三俣石採掘地、池の平（いけんてら）白土採掘地、沖右衛門窯跡、勝山健雄氏宅前の窯跡、水中焼窯跡があげられる。以下、各々の遺跡について概要を述べておきたい。

１、三俣石採掘地　須坂市春木町在住の牧和彦氏が所蔵している藤沢焼盃台の器底に「以山田三俣山石造之　於藤沢製之」と銘記され、三俣石で藤沢焼磁器が焼かれたことがわかる。

また、奥山田区有文書には、「陶器石産地并発見年歴　奥山田分桑山ノ内字三ッ俣ニ於テ文久元年中藤沢龍右衛門発覓　但共有地」とあり、ついで「廃業開業年暦」が記され、「地位并性質　口分ヨリ丑の方へ廿丁バカリ距リテ一山悉ク陶石ナリ　其質ノ如ハ三阿白ト唱フル砥石ニ似テ是ヲ細粉トナシ　器物ヲ造レバ堅而ニシテ又素焼器ニ宜シク　又灰ヲ和レバ釉薬ニヨロシ」「出石掘採法　鶴


史料１　奥山田区有文書



第４図　関連遺跡分布図（１：50,000）
（1.藤沢窯跡、2.三俣石産出地、3.池の平、4.沖右衛門窯跡、5.勝山健雄氏宅前の窯跡）

嘴ト唱フル器具或ハ鍬等ヲ以テ掘採ス」とし、「溶化製煉法」について記し、最後に「産出高未定と」している。

このことから、昭和52年に高山村公民館宮関分館が主催し、地質学研究者の島田春生氏、陶芸研究者の荻原恒夫氏らの同行を願い、三俣石採掘地の踏査を行った。奥山田の渕ノ沢川に沿って約６km遡上し、三沢山（1800m）の中腹に至ると、白色の原石が露頭している地点がみつかった。どうやら、この辺が採掘地であったらしい。附近を調べてみると、約200ｍ下方に人為的に削平された狭い平地がみつかった。当時は採掘した原石を人力でここまで運び、さらに牛馬の背を借りて藤沢まで搬出したものであろう。

２、**池の平白土採掘地**　三俣石の石粉に混入した白土の採掘地、池の平は、山田温泉下の松川の段丘上にあったが、慶応２年の山崩れで一変してしまい、現在は白土を採掘することも、その採掘跡地を確認することもできない状態である。この山崩れでは白土採掘中の２人が犠牲になっており、高山村大字牧の黒岩浅人・黒岩利男両氏宅に、「釈晃順不退位　慶応２丙寅４月16日」・「釈運道不退位　慶応２丙寅４月16日」の法名を残している。また、この白土は女性が髪の油落しなどに利用していたということから、吉向松月氏の指摘どおり、蛙目粘土に近い性質をもった土と思われる。

３、**沖右衛門窯跡**　この窯跡は高山村大字宮村字ろくびに所在している。附近一帯を所有していた松本沖右衛門によって築かれた窯で、藤沢窯とは約1.5kmの距離にある。主として藤沢

窯のレンガやサヤ、あるいは各種の窯用具を焼いていた。それは、藤沢窯附近では良質な粘土が得にくかったため、粘土に恵まれた沖右衛門窯に窯用具等が求められたものといえる。この窯では、窯道具以外に、近在の住民に請われるままに素焼の火鉢やアンカ等も製造しており、「沖右衛門焼」という名称で今でも所蔵されている。製品は環元焔で焼かれ、よく使い込まれて黒つやがでたものが多く、中には独創的な作りのアンカも残っている。

この窯の型式は未発掘のため明らかでないが、地表観察によれば、３段ぐらいの小型登窯か、あるいは大型の丸窯ではないかと推測される。窯跡からは、窯道具であるツク、タナイタ、長方形レンガ、及び藤沢焼用サヤの破片等が多く出土している。また、ほんの少しであるが、高温のため溶けつぶれたサヤの中に、着彩の少ない白色磁器がはさまった状態で採集されている。これは、藤沢窯が廃窯された時点で、沖右衛門が磁器を試焼したことを物語っている。ただし、製品化するまでに至らなかったようである。

もともと、沖右衛門窯は藤沢窯とともに安政５・６年頃に築窯され、慶応２・３年頃に廃窯されたと推測されるが、仮に地元の要望に応じて藤沢窯の廃窯後も土器雑物を製造していたとしても、それは明治８年に沖右衛門が山田温泉の松本屋旅館主・松本良右衛門へ養子入籍するまでの間と思われる。

４、勝山健雄氏宅庭前の窯跡　この窯跡は高山村久保の勝山茂美氏宅の庭前に所在している。藤沢窯が廃窯された後、藤沢焼の陶工であった湯本角蔵が、当時の高杜神社宮司、勝山健雄氏の要請をうけて築窯したものである。しかし、この窯では磁器焼成に必要な温度が上らず、原料の入手も困難なこともあって、藤沢窯に匹敵するような作品は焼けなかったようである。また、絵付も須坂焼に似たものがあったり、瀬戸方面から移入した白磁器の盃や茶碗等に絵付をしたり、飲食店名等を記入して焼き付けたりしたものも見受けられる。

なお、この窯で焼かれた製品の中に、下高井郡山ノ内町渋温泉、らじお館主、山口高則氏所蔵の、児玉果亭銘入の絵付盃が伝世品としてある。

５、水中焼窯跡　藤沢窯の廃窯後、明治３年に湯本角蔵は高山村水中の湯本長蔵の養子に入り、翌明治４年、長蔵の死により家督を相続した。その後、水中に窯を築き、水中の赤土を使い、水中焼あるいは角蔵焼と称して、土釜、火鉢、手あぶり等を焼いたと伝えられている。その製品は、高山村荒井原の山崎茂氏や高杜神社所蔵の火鉢等が伝世されているが、焼いた時期や窯業年数等は全く不明で、窯跡の位置をはじめ、関係文書の所在も確認されていない。

いずれにしても、勝山健雄氏宅庭前の窯跡と同様、藤沢窯の廃窯後、陶工湯本角蔵にかかわる築窯であり、残念ながら、いわゆる藤沢焼磁器の流れをくむ形跡がみあたらない。いいかえれば、藤沢焼は藤沢窯の廃窯とともに継承されることなく、消滅したのである。

以上の関連遺跡の他に、藤沢窯に直接関係する藤沢焼の「土練り場」「ロクロ引き場」「絵付場」「窯祭神場」等の未確認遺構が、どうも藤沢窯の上部段丘上に所在するのではないかと思われる痕跡があり、今後の調査課題とされている。

第３章　藤沢窯の構造と出土遺物

第１節　藤沢窯の構造

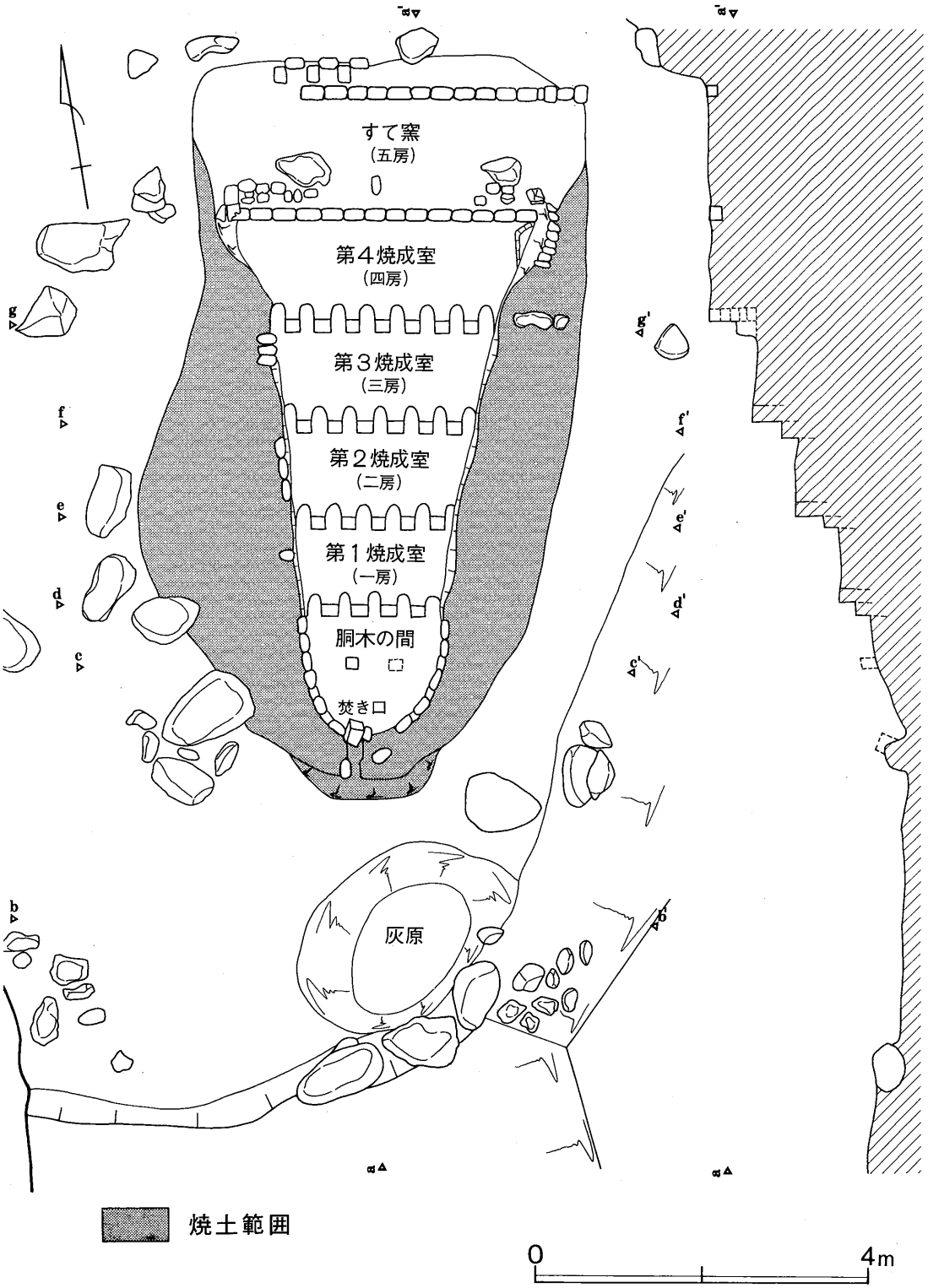
藤沢窯跡の発掘調査に際しては、窯跡の主軸を基準に２ｍ毎のグリッドを設定した。グリッドは南北に１から、東西にA から名付け、窯跡内やその周辺の遺物採集に配慮した。窯跡は、先述のとおり、斜面を14.8m×８ｍの範囲で、約1.5ｍ掘り下げた楕円状の窪地内に構築されているが、その窪地はゆるやかな傾斜をなし、窯体より西側の段丘縁に向ってテラスを形成している。

窯体は焚口のある胴木の間から上段に、縦狭間で繋がる５室の焼成室があり、有段連房式または縦狭間式連房とよぶ登窯である。登窯の傾斜角は約25度あり、上段へいくにしたがい窯幅を増している。窯全体の規模は、長軸が８ｍ、短軸で最大が4.4ｍ、最小が1.5ｍあり、ラッパ状の形態を呈している。

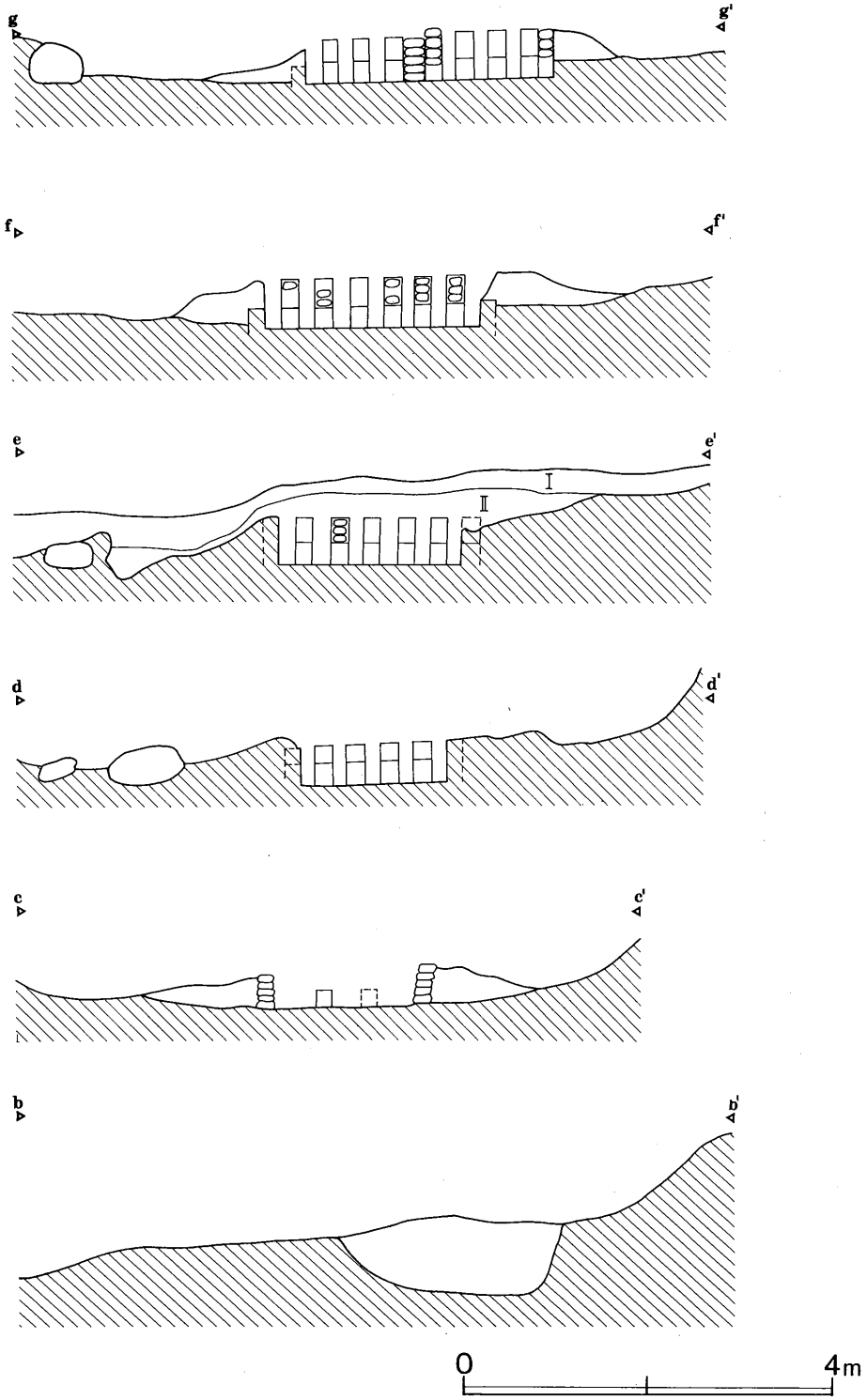
窯体の各々についてみると、まず、焼成室の最下段にある胴木の間は、奥行きが1.4ｍ、最大幅が1.6ｍあり、床面は第１焼成室に向いゆるやかな傾斜をなしている。焚口部分は幅60cmあり、方形レンガで閉塞している。方形レンガは１個のみ現存していたが、実際は３個あったと考えられる。この胴木の間は、５段に積まれた俵状レンガで壁を作っており、焚口から第１焼成室にかけて孤状に広がっている。また、胴木の間のほぼ中央には、20cm×15cmの方形レンガを用いて、一対の分煙柱を置いている。レンガは片側が欠損している。

焼成室は５室あり、第１焼成室から第４焼成室までは階段状になり、狭間によって繋がっている。第４焼成室と第５焼成室の間のみは階段状にならないで、方形レンガを埋めて区画している。焼成室の床はほぼ平坦で、幅に対して奥行きの短い長方形をなしている。各々の焼成室は、第１焼成室（一房）が1.7ｍ×0.7ｍ、第２焼成室（二房）が2.1ｍ×0.9ｍ、第３焼成室（三房）が2.5ｍ×0.9ｍ、第４焼成室が3.5ｍ×1.0ｍあり、すて窯とされる第５焼成室（五房）は4.0ｍ×1.3ｍの規模を有している。

また、第１焼成室から第４焼成室間に段差をなす縦狭間は、高さが48cmあり、狭間穴の直径は20cm内外を有す。狭間穴は、胴木の間と第１焼成室との間が５穴で、上段へいくにしたがい１穴づつ増え、第３焼成室と第４焼成室の間は８穴になる。狭間は20cm×15cmの方形レンガを椅子状に組合せており、その段がつく部分に俵状レンガを４段積んで、構築した間に設けている。第４焼成室と第５焼成室は共に背後に方形レンガを14個敷き並べている。この両者の幅は約0.8ｍのずれがあり、各々が両側に俵状レンガを組合せた煙穴をもっている。なお、第５焼成室の背後は急斜面の自然地形になる。なお、狭間に用いられた方形レンガの中に、「㊤」の刻印が施されたものがいくつかあった。



第5図　藤沢窯跡実測図



第 6 図　窯跡断面図

以上の窯体内部に対して、外周部の状況をみると、窯跡の周囲は焼土が約１ｍの幅でとりまくように分布している。窯の天井や壁は崩壊して当時の姿は不明だが、狭間近くに円柱の痕跡がいくつか残っており、その片鱗がうかがわれる。また、入口も不明だが、両側の壁に俵状レンガが積まれた部分とない部分があり、入口に関連するものと思われる。

焚口の手前では、何かの目的で掘りくぼめられた所があり、灰原は焚口から0.7ｍほど西側に離れた所に設けられている。2.8ｍ×２ｍの楕円形をなし、深さは80cmを有す。この中からサヤや磁器破片が多量に出土し、さらに、西側の段丘崖にかけて遺物が散在していた。段丘崖に向って灰をかきだした様子がうかがわれる。

第２節　出土遺物

出土遺物としては、磁器、窯道具、窯構築のレンガ及び鉄製品がある。量的にはレンガが最も多く、ついで窯道具、磁器、２点の鉄製品である。全体の出土量はりんご箱にして約140箱もあり、これらの中から比較的保存状態のよいものを抽出し、実測図または写真図版にして報告することとした。文中では実測図と写真図版を通し番号にした。また、個々の詳細説明については観察表を参照されたい。

１、**磁　器**（１～68）

主として灰原等、窯の前面の平坦部から集中的に出土した。器種には急須・土瓶・蓋・皿・鉢・碗・壺・茶碗・花器・盃・盃台等がある。焼き歪みのある破損品がほとんどであるが、生焼けのものも若干出土している。以下、各々の器種について概要を述べておきたい。

急須（１～18）　点数としては最も出土量が多い。大・中・小の３種類に分けられる。

大型品には、やや厚手で口唇に鉄釉を施し、唐人と漢詩絵のあるやや下ぶくれのする器形のもの（３）、肩と胴下部に段を有する漢詩絵のもの（６）、口唇に鉄釉、口縁下に板目垣文、胴に唐人と竹林絵のあるもの（14）、胴に草花絵のあるもの（15）、やや薄手で口縁下にあじろ文または唐草文、胴に漢詩のある丸みのある器形のもの（７・８）がある。

中型品は、出土量が最も多く、比較的偏平に近い器形で、胴に「光貫」銘和歌があるもの(１)、口縁下に魚の目文、胴に竹林と和歌があるもの（２）、梅と漢詩があるもの（５）、あじろ文と吹墨ある竹林（９）、あじろ文と橘（10・11）、がある。筒型に近い器形で、あじろ文と梅に草花（４）もみられる。このほかに銘入りとしては、「藤沢製」「清山製之」「樵夫製之」「与三製」「道八製」「峯参」等が出土している。

小型品は、肩と胴下部に段を有するもので、薄手で造りのよいものが多い。あじろ文と牡丹のあるもの（12）、線文で区切り、山水のあるもの（13）、等がある。小型品はおそらく玉露茶用具と思われる。注口と把手は唐草文がほとんどである（17・18）が、把手で唐草文と漢詩の一節と思われる字句のあるもの（14）もある。底部は薄く、欠損したものがほとんどであるが、

中央に渦巻の凸帯がみられる。同様のものは急須蓋内面にも施されている。

土瓶（19）　ロクロ目が極端に目立つもので、胴下半に山水の絵付が施される。胴下端に「貞兵」銘の刻印がある。

蓋（20～32）　急須の蓋と、壺または鉢の蓋と考えられるものとがある。急須の蓋（20～31）は、大・中・小・の３種類、また、つまみも円盤状（20～22）、茸状（23～30）、高台状（31）、の３種類がみられる。

20～22は、円盤状のつまみの中央に孔を有す小形の蓋である。20は口唇に鉄釉を施し、梅の絵付、21は無文、22は梅の絵付が施される。おそらく玉露茶用の急須の蓋であろう。

23～30は、宝珠状のつまみと口縁よりに孔を有す中形の蓋である。口縁に沿ってあじろ文、魚の目文の施されるものが多い。23は一対の蝶、24はつまみの周囲に菱形に唐草、25～28はあじろ文に、25は唐草、26は橘、27は梅、28は菊の絵付を施している。29・30は、魚の目文に、29は不明の４文字、30は梅の絵付が施される。

31は高台状のつまみを有す大形の蓋である。口縁に沿って唐草文があり、つまみの周囲に樹木状の絵付がある。また、内面に「貞兵」の刻印がある。これらの蓋の内面は、小形器を除くすべての中央に、渦巻状の凸帯がみられる。

32は壺または鉢の蓋と考えられるものである。つまみは高台状を呈し、周囲に唐草文がめぐる。

皿（33～39・54～56）　大・中・小の３種類がみられる。無文で文字の入る小皿（54～56）、無文で文字の入る中皿（38・39）、唐草や橘等の絵付がある中皿（33～36）、絵付のあるやや大形の皿がある。

37は内面に絵付のあるやや大形の皿であるが、器形は胴中央で「く」字状に開き、口縁が受け口状に立ちあがり、小波状を呈し、底部はへそ高台となる特徴を有している。底部内面に竹林、胴下部に唐草文、口縁下に不明の絵付、外面は口縁に沿って玉だれ文が施される。薄手の造りで、絵付ともに良好である。

33～36は、内面に梅・薊・唐草の絵付のある中皿である。33は底部内面に「清山濱樵製之」銘と胴に梅、胴部外面に蝙蝠の絵付、34は底部内面に薊、胴部外面に蝙蝠と星の絵付が施される。35・36は口縁が輪花状をなし、35は底部内面に「大明清化年製」銘と胴部に唐草、胴部外面に蝙蝠の絵付、36は底部内面に押型による陽刻で「松川之濱」銘と口縁に沿って唐草、胴部外面に巻物と星の絵付、底部中央に「角副」銘がみられる。これらの中皿は、いずれも高台の内面がさらに蛇の目高台となる特徴を有している。

38・39は無文で文字が入る中皿である。38は高台と胴下部に段を有し、直線的にやや開く器形で、底部内面に２行にわたり「草水□□」の４文字がある。39は蛇の目高台で、胴部に丸みのある器形を有し、底部内面に２行にわたり「□琴釜□□□」の６文字があり、底部外面に「里於波」の３文字がみられる。

54～56は、胴中央のやや上より一条の陵線がある高台付の小皿である。いずれも絵付はなく、底部中央の内面に「婦ぢ木」の三文字があり、54は右側に「三」、左側に「八」、さらに「三」、の下に「楚者」、「八」の下に「尓し免」の字句がみられる。55は右側に「三八」、左側に「そば」の字句が、56には、右側に「楚者」、左側に「尓し免」の字句がみられる。他にも同様の小破片が数点出土している。長野市善光寺門前のそば処、「ふじ木」の注文品で、薬味皿ではないかと考えられている。

鉢（40～43）　口径13cm、高さ5cm前後の口縁が受け口状になる小形の高台を有す鉢である。いずれも底部内面に橘の絵付が施され、胴部外面に巻物（40・41）、巻物と蝙蝠（42）、花（43）の絵付がある。また、42・43の底部には「万延歳製」の銘があり、製作年代を示す唯一の資料である。

碗（44～50）　胴部外面に唐草、牡丹、沢潟文等の絵付のあるものと、無文の2種類がある。

44は底部内面と胴部外面に唐草、45は底部内面に「大化年製」銘と胴部外面に飛雲文、46は底部内面に「大化年製」銘と口縁下に花菱文、胴部外面には線描牡丹、47は内面に松竹梅、胴部外面に線描牡丹、高台に沿って蓮弁文、48は口縁内面に花菱文、胴部外面に線描牡丹、高台に沿って飛雲文、49は口縁内面に花菱文、外面全体に緻密な沢潟文が、各々絵付されている。いずれも高台を有している。

50は胴部に丸みをもつやや大形の鉢である。外面は無文、内面は底部に蛇の目の絵付がみられる。これも高台を有している。

花器（51）　瓶子状の小形花器である。底部は極めて厚く、外面に松竹の絵付がある。

壺（52・57～60）　大・小・極小の3種類がある。極小品は化粧道具、小形品は茶壺と考えられる。

52は大形の壺の胴下部である。絵付はなく、「角福」の2文字がある。歪がみられるが、指押えによるものと考えられる。

59・60は短頸の小壺である。いずれも高さは7cm前後をはかり、筒形に近い器形を呈する。59は頸部にあじろ文、胴部に草花、60は頸部にあじろ文、胴部に漢詩絵がある。漢詩は唐代の詩人王昌齢の七言絶句「芙蓉楼に辛漸を送る」の一部であるが、最後の一節は絵付の関係からか省略されている。底部はいずれも上げ底風の高台となっている。

57・58は高さ2.7cm前後の極小の短頸壺である。いずれも胴が丸く、57は魚の目、笹、七宝つなぎ、58は梅と唐草の絵付が施される。ともに手ずくねと思われるが、58の平底には糸切り痕が残っている。

茶碗（53・65～68）　大形で薬湯茶碗と考えられるもの1点と小形で茶碗と考えられるものの2種類がある。

53は薬湯茶碗と考えられるもので、やや厚手の筒状をなす器形である。胴上部を欠損するが、内外面の胴部に梅、高台の周囲にあじろ文、高台の内部に波線、中央に2行にわたって「清山

製之」の銘を有する。また、胴部の梅絵には吹墨が施されている。同様の茶碗は薬湯茶碗として伝世している。

65～68は口径が5cm前後の小形の茶碗である。器形は高台を有し、口縁がやや外反するもの（65～67）と、蛇の目高台で口縁が直立するもの（68）の2種類がみられる。65・66は内面に無文、外面に山水（65）、亀、牡丹、高台の周囲にあじろ文（66）、外面は無文で底部内面に草花（67）の絵付が施される。68は蛇の目高台で、底部内面に「清化歳製」銘、外面に蘇鉄の絵付がある。

盃（61～64）　小形の盃が若干出土している。やや深めのものと、胴に丸みをもつ浅い器形の2種類がみられる。61はやや深めの直線的に立ち上る器形で、高台内部に「藤沢製」銘、62は同様の器形の底部、63・64は胴に丸みをもつ浅い器形で、小さめの高台の内部に「藤沢製」（63）、「口沢製」（64）銘がある。

盃台　出土遺物中に1点ではあるが、側面に窓のあく盃台と思われる小破片が出土している。同様の盃台が伝世品として存在している。

2、窯道具（69～98、103～105）

窯道具としてはサヤ、サヤ蓋、ドチ、ニギリ、色見茶碗がある。

サヤ（69～77）　サヤは作品を入れて重ね、窯内に林立させて焼くもので、作品を守る容器である。焼く器物によってそれぞれ形と大きさが異なる。また、サヤが窯内の高温で溶落し、中の作品をゆがめ潰してしまう失敗を重ねる中で、サヤの耐火度を高めるために三俣石を混入する等、年々改善されていった痕跡がみうけられる。

サヤは筒形で丸底のもの（69～73）、平底のもの（74・75）、楕円形で平底のもの（76・77）に大別できる。

69～73は丸底のサヤで、69・71は筒形を呈し、72・73は胴部がやや内傾し、浅めの器形を呈す。いずれもロクロ目を有す素焼である。

74～77は平底のサヤで、74・75は筒形の器形、76・77は楕円形でタライ状の器形を呈している。74・76はロクロ目を有するが、77は手造りである。いずれも素焼である。

108～117はサヤに付着した状態を示している。108・109は平底の筒形サヤ内に、花菱文のある碗と口縁が受け口状になる鉢、110は丸底のサヤ内に受け口状の鉢、111は楕円形のサヤ内に急須、112は線描牡丹、113～117はサヤに皿が、各々付着した状態のものである。

サヤ蓋（78～80）　方形・円形・楕円形の3種類がある。

78は方形、79は円形、80は楕円形を呈するものである。80は77のサヤとセット関係にあると考えられる。78は素焼、79・80は磁質である。

ドチ（81～98）　ドチはサヤに作品が溶着しないために、サヤ内に敷くものであるが、円形で断面が半円状のもの（81・84・86・87）、同様の中心がくぼむもの（83・85）、円盤状のもの（82・88～95）、リング状となるもの（96～98）の各種が出土している。83・85は磁質であるが、

藤沢窯出土遺物観察表

※　残存
（　）推定

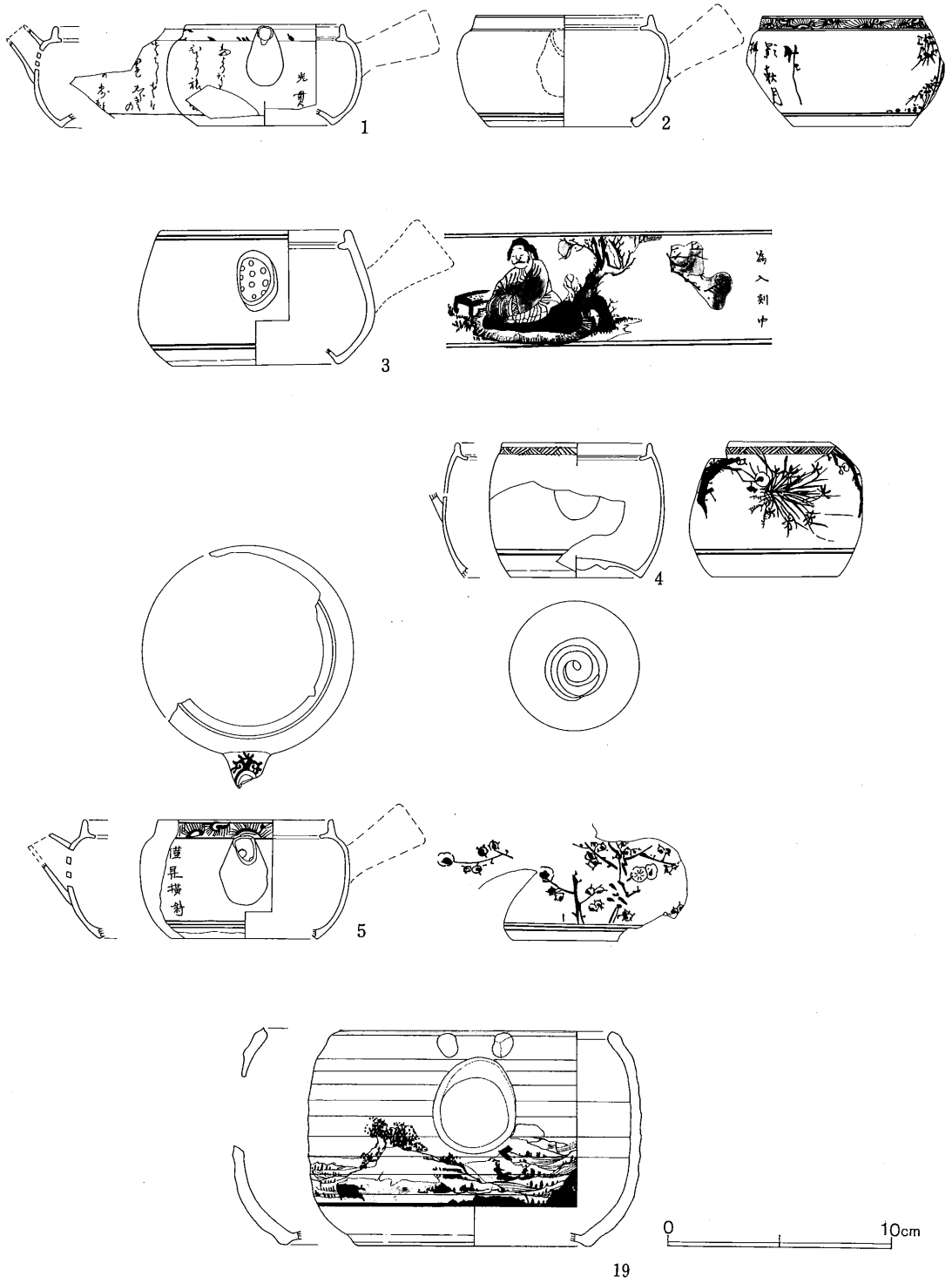
No.	器種名	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内側文様	外側文様	備考
1	急須	(7.1)	(6.0)	4.5		和歌	「光貫」銘
2	〃	(7.8)	(6.5)	5.0		和歌絵	
3	〃	(8.4)	(7.5)	6.0		漢詩絵	(口唇)口サビ
4	〃	6.6	5.8	6.0		あじろ文、梅	(底部)渦巻
5	〃	(7.8)	6.6	5.3		漢詩絵	
6	〃	−	−	※4.4		漢詩	
7	〃	−	(7.9)	※5.4		あじろ文、漢詩	
8	〃	(8.0)	(7.6)	5.9		唐草文、漢詩	
9	〃	7.6	−	5.5		あじろ文、竹林	吹墨
10	〃	(7.4)	5.4	4.8		あじろ文、橘	把手に唐草文、(底部)渦巻
11	〃	(7.2)	(5.6)	5.6		あじろ文、橘	
12	〃	(6.0)	−	※4.6		あじろ文、牡丹	
13	〃	5.2	−	※4.3		山水	
14	〃	(9.8)	−	4.9		板目垣文、竹林の七賢	把手に唐草文、漢詩の一節 (口唇)口サビ
15	〃	−	(8.0)	5.4		草花	注口に唐草文
16	〃	7.0	(6.4)	4.4		あじろ文、梅	注口に唐草文
19	土瓶	(12.2)	(10.6)	9.6		山水	胴下端に「貞兵」の刻印
20	蓋	つまみ径 1.3	4.0	1.1		梅	(口唇)口サビ
21	〃	−	4.3	※0.8			
22	〃	1.9	5.2	1.2		梅	
23	〃	1.1	6.3	2.0		蝶	内面に渦巻
24	〃	−	6.3	※1.4		唐草	内面に渦巻
25	〃	−	6.4	1.2		あじろ文、唐草	〃
26	〃	1.3	6.2	2.2		あじろ文、橘	〃
27	〃	−	6.1	※1.2		あじろ文、梅	〃
28	〃	−	7.2	※1.6		あじろ文、菊	〃
29	〃	−	5.4	※1.5		魚の目文、「○○○○文字」	〃
30	〃	−	7.0	※1.2		魚の目文、梅	〃
31	〃	2.4	8.0	1.8		唐草文、樹木	内面に渦巻、「貞兵」の刻印
32	〃	3.3	11.0	3.5	唐草	唐草	
33	皿	(12.0)	7.3	1.9	梅、「清山濱樵製之」銘	蝙蝠	(底部)高台内蛇の目
34	〃	13.1	7.7	2.8	唐草、`蔔	蝙蝠、星	(底部)高台内蛇の目
35	〃	(12.3)	(8.4)	2.5	唐草、「大明清化年製」銘	蝙蝠	(底部)高台内蛇の目、 輪花状口縁
36	〃	12.5	8.3	2.4	唐草、「松川之濱」(窯刻)	巻物、星	(底部)「角福」銘、 高台内蛇の目、輪花状口縁
37	〃	(17.4)	(11.4)	2.3	唐草、竹林	玉だれ	へそ高台、波状口縁

No.	器種名	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内側文様	外側文様	備考
38	皿	(10.3)	6.8	2.7	「藤沢……」文字		(口縁)口サビ
39	〃	(12.8)	(7.8)	2.8	「○琴釜○○○」銘		(口縁)口サビ (底部)蛇の目「里於波」銘
40	鉢	13.0	6.4	5.2	橘	巻き物	
41	〃	(13.2)	6.2	5.0	橘	〃	
42	〃	13.4	6.6	5.3	橘	巻き物、蝙蝠	
43	〃	13.8	6.0	5.2	橘	花	(底部)「萬延歳製」銘
44	碗	13.7	5.2	7.1	唐草	唐草	
45	〃	−	5.7	※3.8	「大化年数」銘	飛雲文	
46	〃	−	(5.6)	7.1	花菱文、「大化年製」銘	線描き牡丹	
47	〃	−	(5.6)	7.4	松竹梅	線描き牡丹、 弁文	
48	〃	11.4	(5.8)	6.6	花菱文	線描き牡丹、飛雲文	
49	〃	12.0	−	※5.0	花菱文	沢瀉唐草	
50	〃	(14.5)	5.3	7.7			(内面)蛇の目
51	花器	−	5.5	※10.6		松竹	
52	壷	−	8.6	※9.7		「角福」銘	
53	茶碗	−	6.3	※7.3	梅	梅、あじろ文、吹墨	(底部)「清山製之」銘
54	薬味皿	7.0	3.5	3.1	「三八そば婦ぢ木尓し免」		善光寺前そば処「ふじ木」の注文品?
55	〃	(7.1)	3.4	3.1	「三八ふぢ木そば」		〃
56	〃	(6.8)	3.3	3.4	「楚ば婦ぢ口尓し免」		〃
57	茶壺	2.7	3.4	3.5		魚の目、笹、七宝つなぎ	
58	〃	2.6	2.8	3.4		梅、唐草	(底部)糸切り痕
59	〃	3.5	4.9	7.5		あじろ文、花、葉	
60	〃	4.3	5.4	7.0		あじろ文、漢詩絵	
61	盃	−	3.2	※4.0			(底部)「藤沢製」文字
62	〃	−	3.2	−			(高台内)「藤沢製」文字
63	〃	−	2.8	※2.9			(底部)「藤沢製」文字
64	〃	−	(2.4)	−			(底部)「○沢製」文字
65	茶碗	7.4	4.0	5.5		山水	
66	〃	8.0	3.7	5.4		亀、牡丹、あじろ文	
67	〃	6.2	3.0	4.5		草花	
68	〃	7.8	4.0	4.1	「清化歳製」銘	蘇鉄	(底部)蛇の目

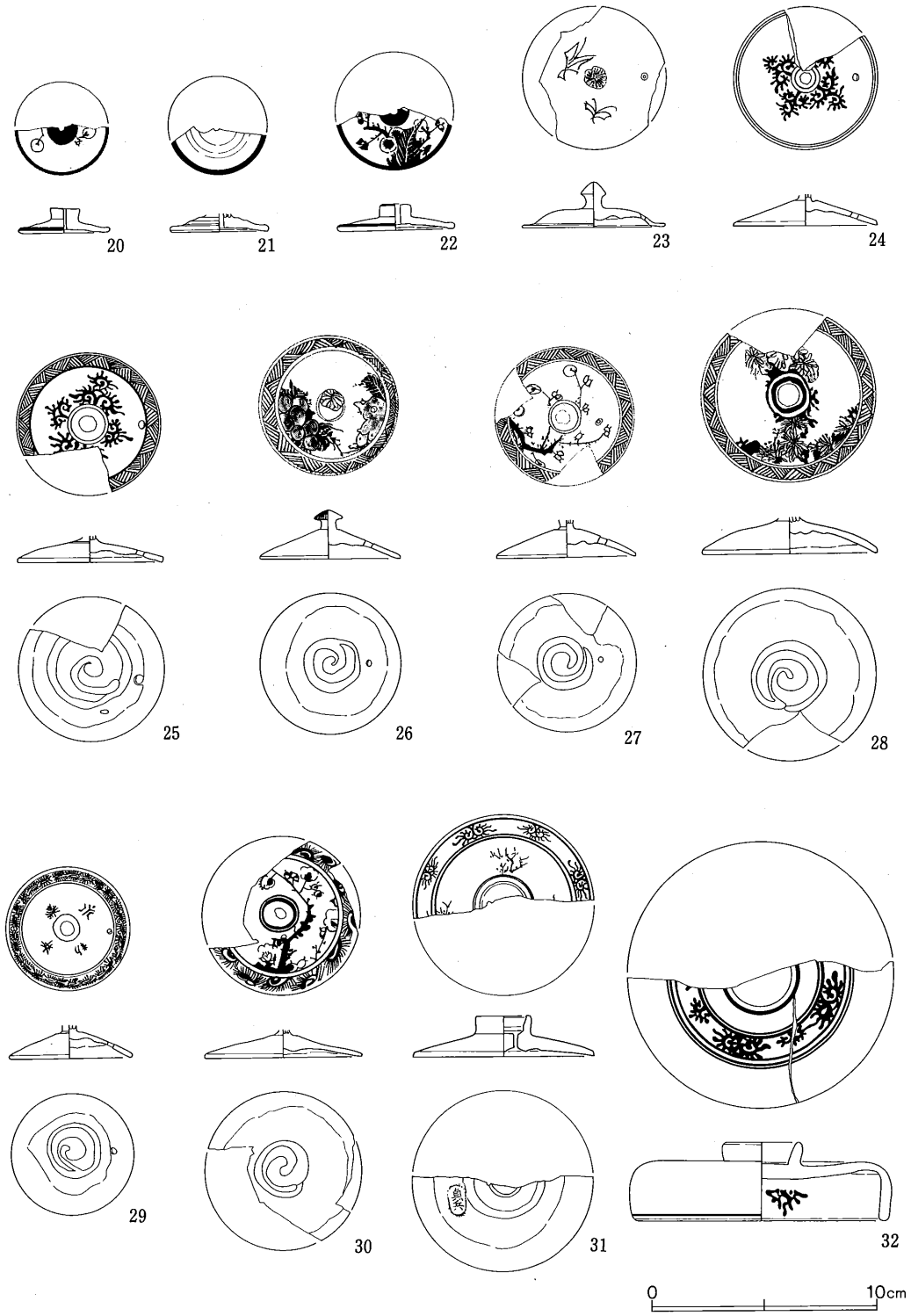
窯道具

No.	器種名	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考		
69	さや	8.7	9.4	6.7	丸底素焼		
70	〃	10.1	10.1	6.2	丸底 〃		
71	〃	10.5	10.5	5.9	丸底 〃		
72	〃	16.1	16.1	5.9	丸底 〃		

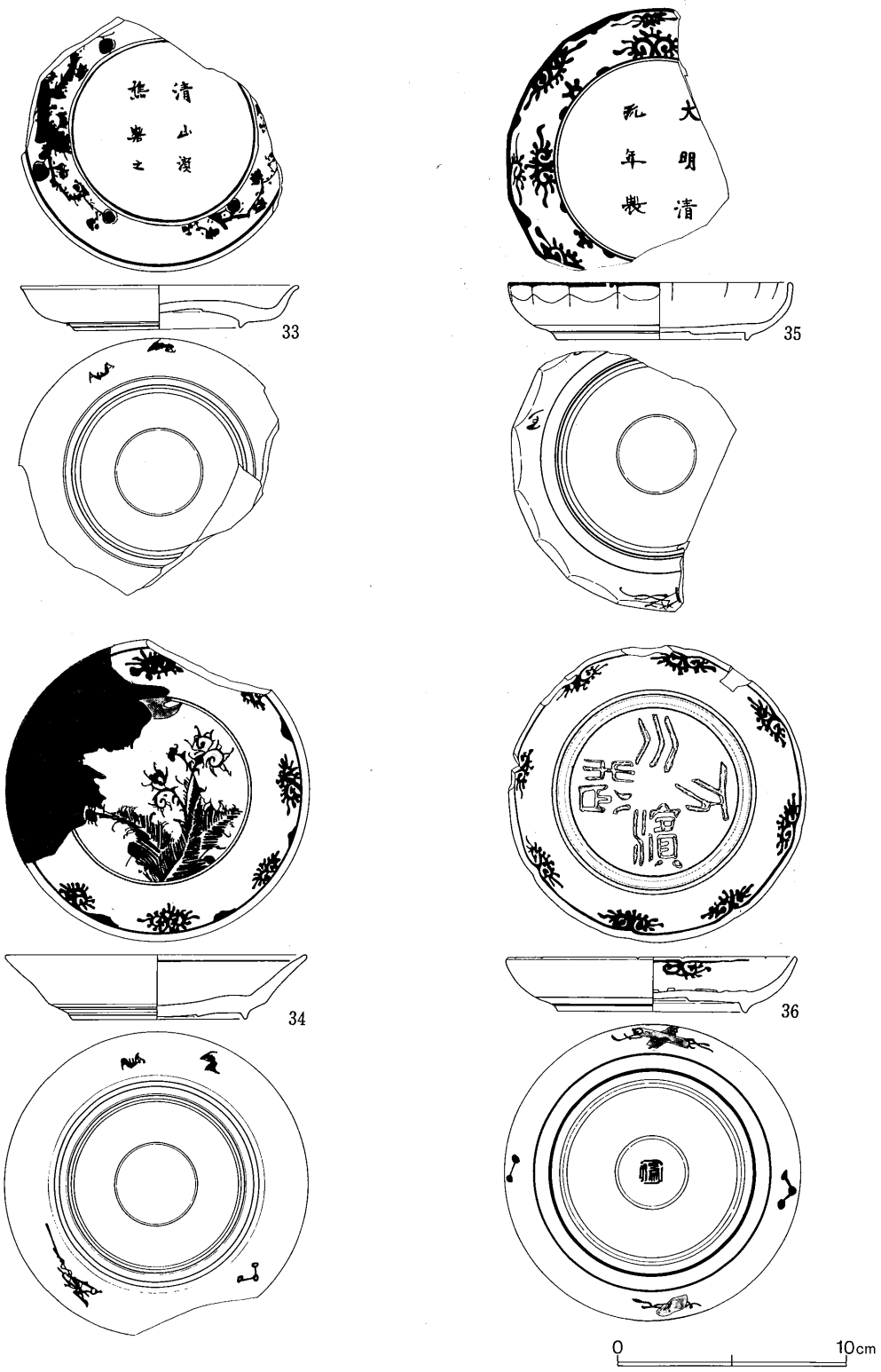
No.	器種名	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考
73	さ　や	13.7	15.0	5.9	丸底素焼
74	〃	(12.3)	12.8	10.2	平底素焼
75	〃	13.5	14.3	13.1	平底素焼
76	〃	19.8	17.9	7.1	平底素焼
77	〃	26.3	24.5	11.6	平底素焼楕円形状
78	さや蓋	残存 15.0		2.4	長方形素焼
79	〃	−	17.1	1.8	円形磁器質
80	〃	−	26.7	2.3	楕円形磁器質
81	と　ち		5.6	1.1	素焼
82	〃		7.8　8.6	0.9	素焼、だ円形状
83	〃		6.8　9.8	2.1	磁器質
84	〃		6.0	1.8	素焼
85	〃		4.5　6.9	1.2	磁器質
86	〃		6.5	1.8	素焼
87	〃		7.2	1.7	〃
88	〃		7.2	0.5	〃
89	〃		6.6　7.2	0.6	〃
90	〃		8.4　9.0	0.9	〃
91	〃		10.1	1.1	〃
92	〃		10.1	0.9	〃
93	〃		9.5	1.1	〃
94	〃		上部凹径 −7.8 10.2	1.7	〃
95	〃		10.5　11.3	1.1.	〃
96	〃		穴径 4.1　7.1	1.8	輪とち素焼
97	〃		穴径 6.5　13.1	2.3	素焼輪とち
98	〃		穴径 5.3　13.7	3.9	素焼輪とち
99	たわら形レンガ		8.3	5.6	俵形、素焼、窯の構築材
100	〃		18.5	7.4	〃　〃　〃
101	〃		11.7	5.4	〃　〃　〃
102	〃		12.3	6.0	〃　〃　〃
103	にぎり		4.5	1.7	〃
104	〃		4.2	7.1	〃
105	〃		3.5	5.9	〃
106	レンガ	厚さ	短辺 15.8	長辺27.5	方形素焼、窯の構築材
107	楔	幅 5.6	厚さ 3.0	長さ17.9	鉄製、径 1.3 cmの穿孔
108	釘	頭径 1.0	径 0.5	長さ 7.5	鉄製



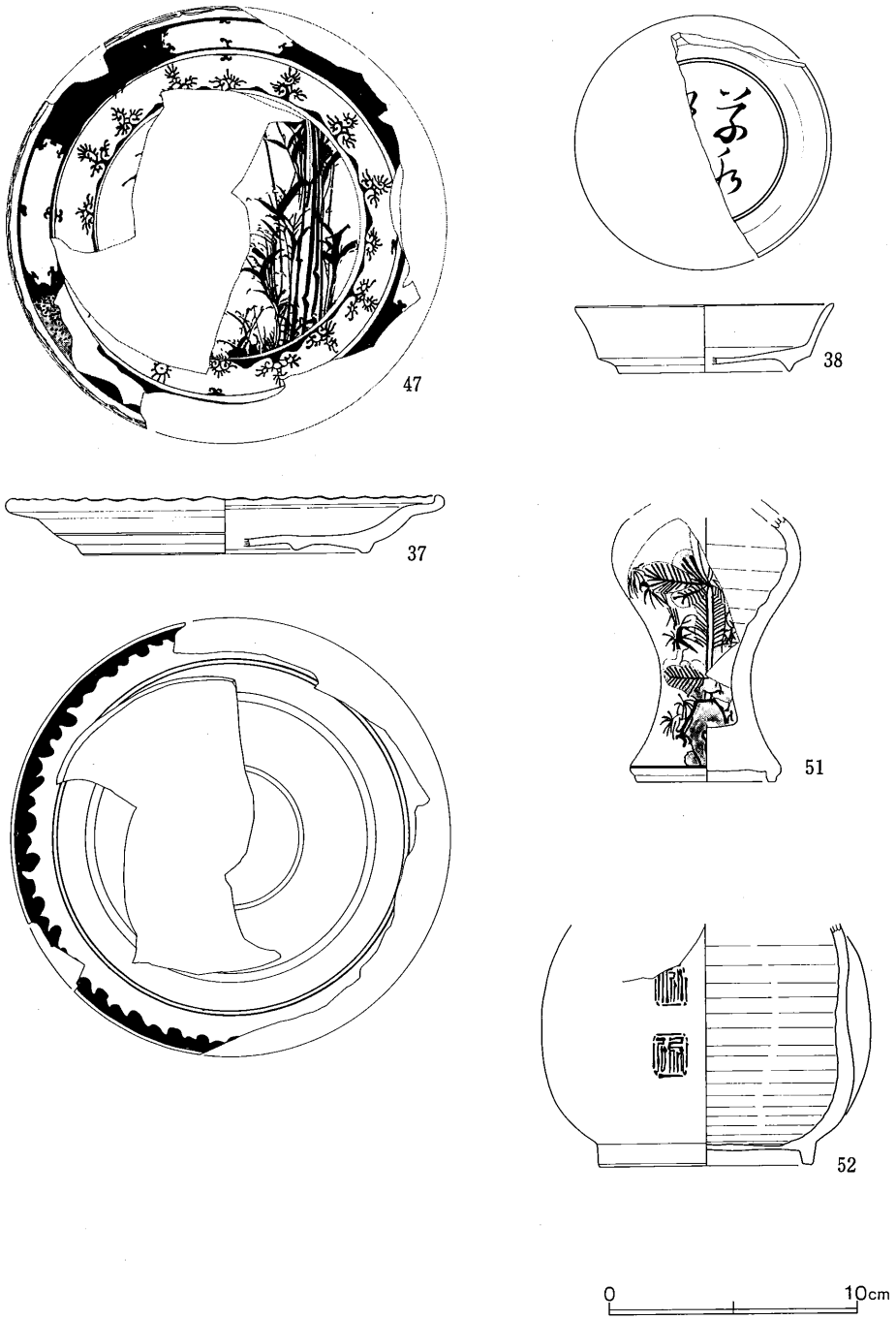
第７図　急須・土瓶実測図



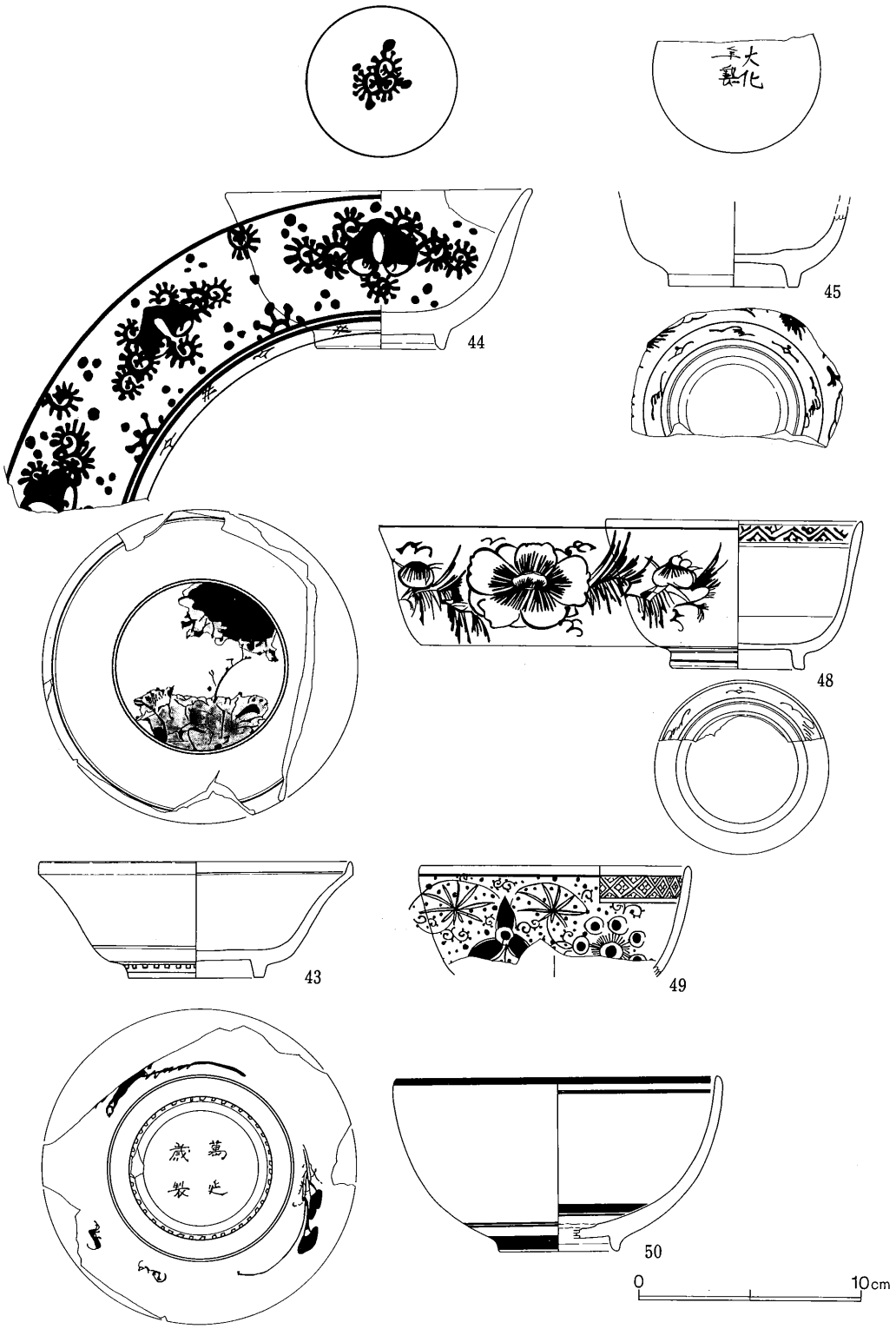
第8図　蓋　実測図



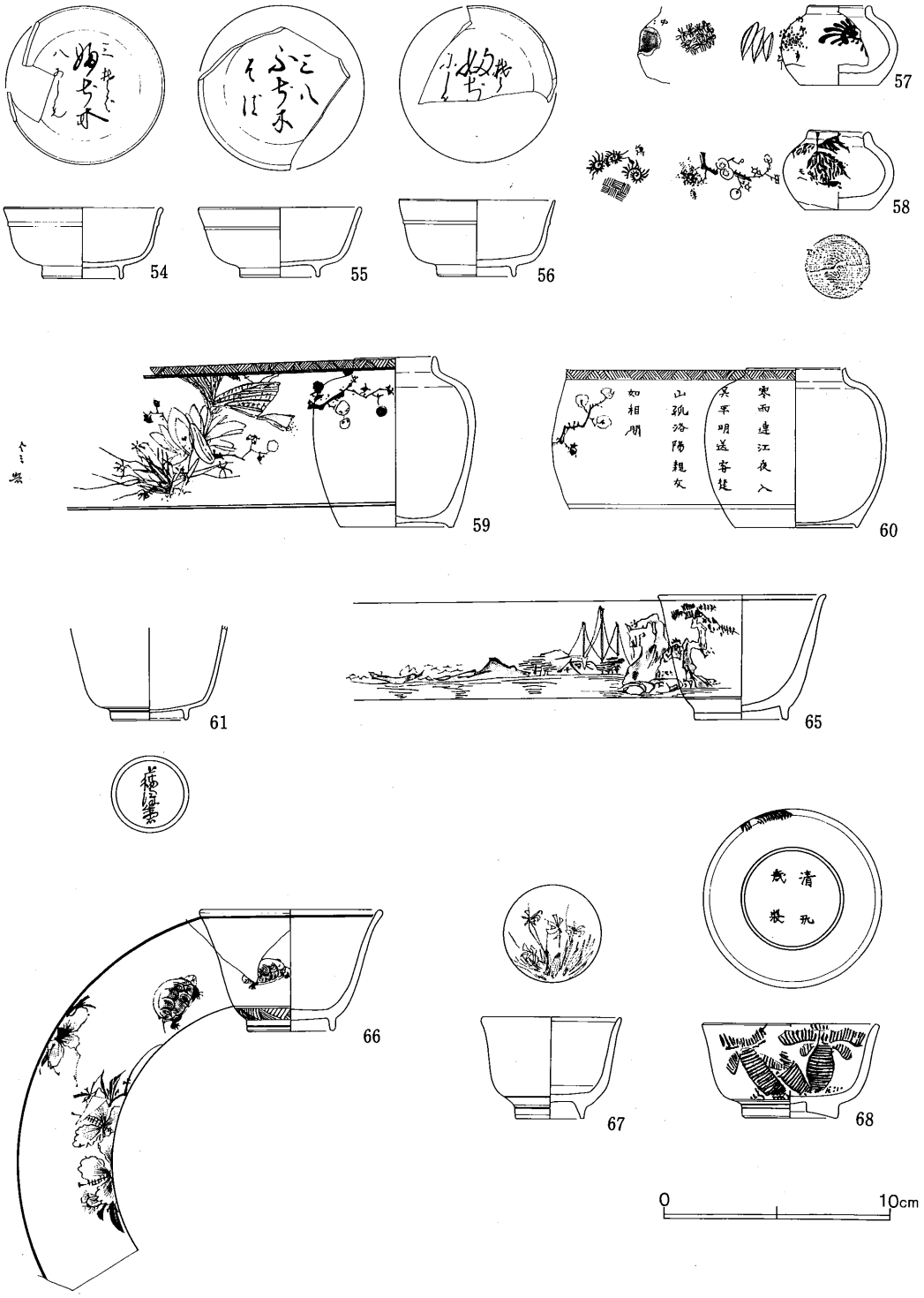
第9図　皿　実測図



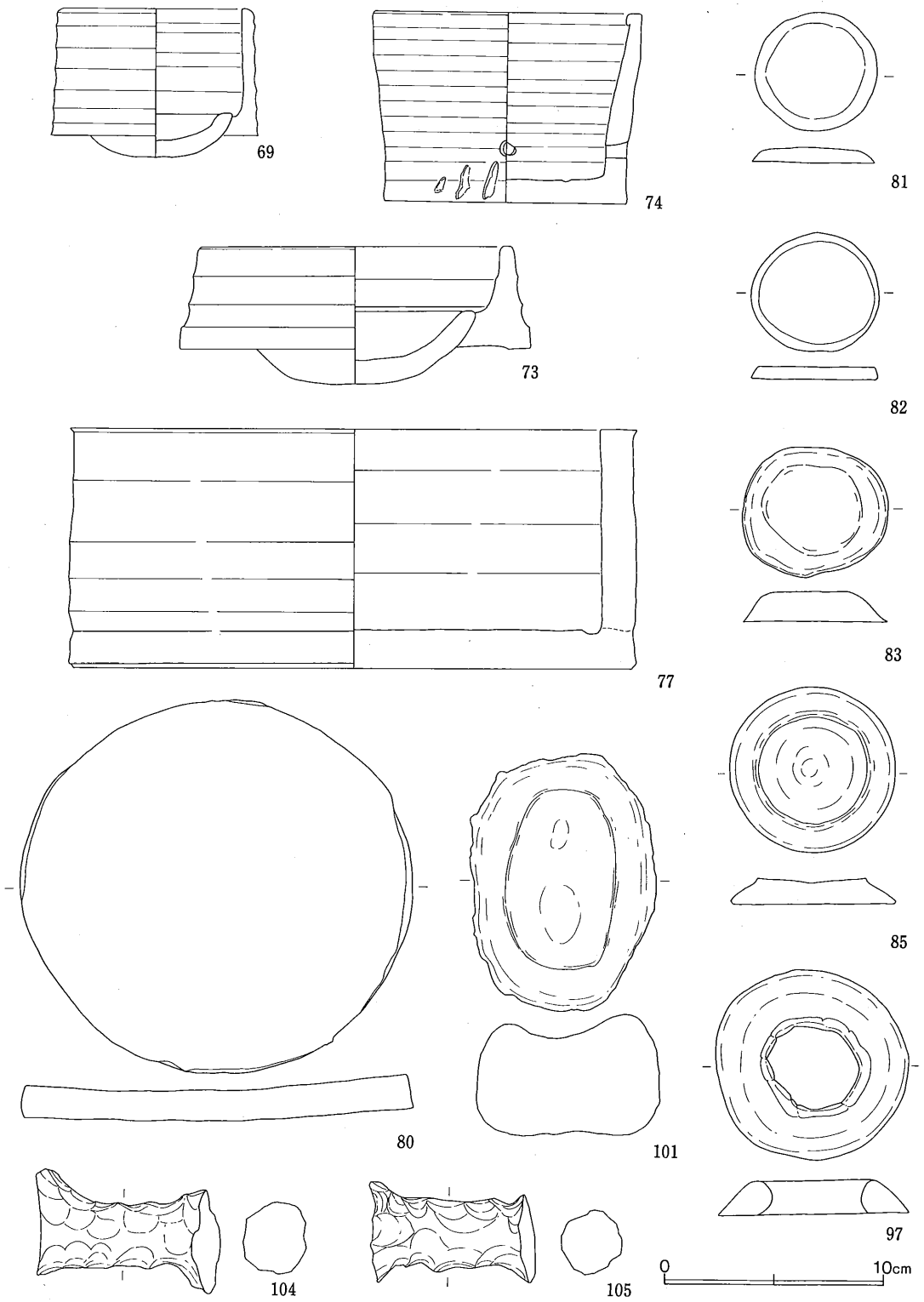
第10図　皿・花器・壺　実測図



第11図　碗　実測図



第12図　盃・茶壺等実測図



第13図　窯道具実測図

他は素焼である。

ニギリ（103～105）　焼成室に林立するサヤが火勢で倒れないように、また、一定間隔以上に接近しあわないように、サヤとサヤの間を支え合わせる役目を果したのがニギリである。団子状のもの（103）と、棒状の２種類がある。103は上下に指頭圧痕がみられる。104・105は上下面が平坦で、側面に握りしめによる指腹圧痕が顕著に残るものである。いずれも素焼であるが、棒状のものには三俣石の粗粉末を用いた磁質のものも出土している。

色見茶碗　窯跡から出土した色見茶碗は、浅茶碗をいとじりの中央までくさび形に切りこみ、いとじりの中央に穴をあけた形をなしている。これに焼成中の作品の釉薬と同じものを塗り、窯焚きの途中で時々この色見茶碗を火箸にひっかけて取り出し、火のまわり、温度、釉薬の解け工合をみるのに使用した。

３、窯構築レンガ（99～102・106）

窯の構築材として使用されたレンガは、俵形（99～102）と、方形（106）の２種類がある。俵形のレンガは大・中・小の３種類からなり、いずれも上下の中央がくぼむ特徴を有している。方形のレンガはほぼ同規格品で、側面の中央に藤田屋の屋号「㊤」の刻印のあるものもみられる。いずれも素焼である。俵形のレンガは主に側壁や床内部に、方形のレンガは分煙柱や焼成室の壁等の主要部分に使用されたものである。

４、鉄製品（107・108）

大形の鉄製楔（金矢）と鉄釘が各１点出土している。107は長さ17.9㎝、巾５.６㎝、厚さ3.0㎝をはかり、上部に径１.３㎝の穿孔を有する楔である。薪割用に使用されたものであろう。108は長さ７.５㎝をはかる断面方形の釘である。

第４章　藤沢焼の工程と三俣石

第１節　藤沢焼の工程

搬出された三俣石を、酒倉の水車により特製の底深い石臼で粉砕する。できた石粉は水簸して練り、ねばりを強めるため、これに池の平の白土を１～２割混入する。

次に成形を行うが、ロクロ引き成形の他に、木型を用いて成形したものも多く作られている。「松川之濱」銘のある皿はこの方法で作られている。成形に従事した陶工は、湯本角蔵を中心に松本沖右衛門、藤沢龍右衛門等、数名が加わっていると思われる。

成形した作品は乾燥させ、素焼をする。この素焼は本焼用の登窯を用いたか、別に専用の素焼窯をもっていたか、今の所確認されていない。あるいは、藤沢窯の一番上段にあるすて窯の遺構からみて本焼の余熱を使って、次回の本焼用作品の素焼をしたのではないかと考えられるが、素焼時における焼物の破片が出土していない。

絵付については、藤沢焼にみられる多くの銘や書き判の種類、あるいは染付の図柄や漢詩の違いから、成形に従事した陶工の他に、児玉果亭や加藤半渓ら、幾人かの文人や画人が参画ししていたように察せられる。なお、絵付はすべて呉須一色による手がき染付であるが、中には弁柄による口べニづけの茶碗が発見されている。また、前掲の奥山田区有文書には、三俣石の粉末に木灰を混入し、釉薬を作り用いたと記している。

作品が800個から1000個位に達すると、本焼が行われる。本焼の時期は初秋から初冬にかけてと想定される。冬期間に伐切された松薪や楢薪がよく乾燥しているからである。作品の窯詰作業は、なるべく多く詰めるが、焼けむらを起さないように火焔の火通りをよくするため、陶工の持てる力がそれに注入された。

窯詰めが終ると、各焼成室の入口を薪投入口の小さな窓だけ残し、レンガと練粘土でふさぎ、いよいよ火入れとなる。火入れは、火入れの神事とともに胴木の間の焚き口に着火され、窯全体を十分に温めたところで、第一焼成室の焼成にとりかかるのである。第1焼成室の焼きあげが完了すると、1時間位の休息をとって、すぐ第2焼成室の焼成に移る。こうして第4焼成室まで順に焼きあげて行き、最後に窯の火をとめるのである。これには数日間を要し、昼夜の別なく火を焚き続け、炎の色、焼けているサヤ、試焼の色見茶碗等を見守り、陶工の熟練した感覚による焼成が続くのである。

窯の火をとめた後、自然冷却をまって各焼成室の両側にある壁をはずして中に入り、作品をサヤ毎にとりだすのである。この時、窯焚きの成功・不成功がはっきりするのであるが、窯跡から発掘されたおびただしい破片は、焼成の失敗による残欠である。しかし、藤沢焼の代表的な伝世品といえる盃台は、牧和彦氏の所蔵品中にあるにもかかわらず、残欠が1つも窯跡から発掘されていない。このことは、この時の窯の焼成が成功し、失敗した作品がなかったことを意味しているのであろう。

第2節　三俣石の成分分析と焼成実験

1、**成分分析**　昭和54年に三俣石と藤沢焼茶碗の成分比較分析を長野県工業試験所に依頼したが、その結果は左表のとおりである。このことから、三俣石の主成分は珪酸であり、藤沢焼茶碗の成分とほぼ一致している。藤沢焼茶碗の方が三俣石に較べて珪酸分が5.04%小なく、アルミナ分が1.65%多いのは、三俣石の石粉に、池の平の白土を10%前後混入した結果によるものと考えられる。

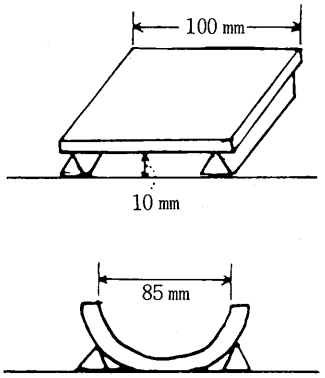
三俣石成分分析表

物件＼成分	珪　酸	アルミナ	鉄　分	計
三　俣　石	84.40%	13.25%	0.61%	98.26%
藤沢焼茶碗	79.36%	14.90%	0.95%	95.21%

（計が 100%に満たない分は水分等）

2、**焼成実験**　藤沢焼の焼成温度等を調べるため、永見鴻人早稲田大学院講師と、東京都練馬区在住の陶芸研究家芳村俊一氏に焼成実験を依頼した。

永見講師の実験によれば、三俣石単味（100％）のものから、90％、80％～50％と順次おとし、それに見合う蛙目粘土を10％、20％～50％混入し、各々の小盃を作成した。これを焼成してみると、三俣石単味のものは1250℃で焼結しはじめ、1300℃ではとけて形がくずれてしまうことがわかった。すなわち、藤沢焼に要する温度は1280℃プラス・マイナス10℃に窯内をそろえることが絶対条件である。



第14図　テストピース実験図

これに対し、芳村氏は三俣石を粉末にしてテストピースを作り、焼成実験を行った。その結果、約800℃で素焼した場合、特徴的な変化はみられなかったが、1320℃で本焼した場合、収縮率14％、熔落率100／710（100㎜に対して10㎜以上落下）となり、この数値では高くて磁器化しすぎ、とけ落ちて焼物にはあまりよくないことがわかった。

また、小盃状のものでテストを行ってみたが、約1280℃で焼成した場合、形は崩れず、成形した時の形で焼けた。また、磁器にまで焼結し、少し白く光るぐらいに焼けていた。ただし、高台の部分は窯の棚板に焼けついて離れず、無理にはがすと高台の一部が欠けてしまった。

以上の結果により、三俣石はアルカリ分が多く、したがって耐火度は低く、三俣石単味では高度の焼成技術を必要とする原料であることがわかった。現代のように温度計に頼れず、窯焚きの熱管理はすべて陶工の勘と熟練に委ねられていた当時を考えれば、藤沢焼の技術はかなり高水準のものであったといえる。

第５章　藤沢焼の歴史的背景

江戸時代も終り頃になると、北九州の伊万里や有田では白い焼物（磁器）が増産され、伊万里港から通称「伊万里焼」が全国へ移出されるようになった。内陸の信州へは越後から信濃川を遡り、飯山・中野・須坂・長野、さらには上田方面にまで販路が求められたようである。旗をたてた伊万里船が千曲川を遡上してくると、沿岸の人々は競って伊万里や九谷の焼物を買い求めた。当時の風潮としては、この白い焼物を所持することが誇りでもあり、財力の象徴にもなっていたので、これを入手しようとする願望はきわめて強かったといえる。

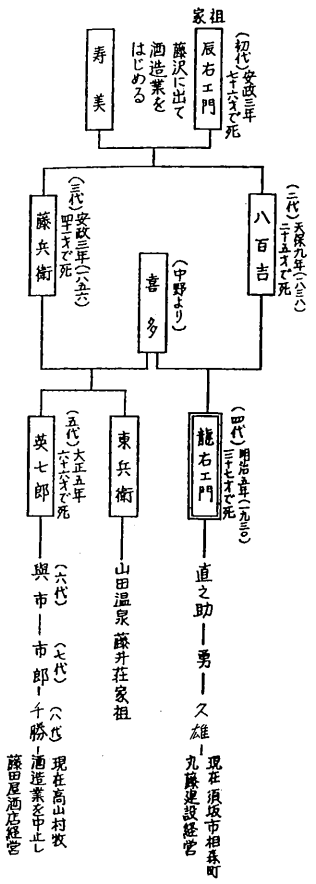
このような風潮を背景に、須坂地方では吉向焼となってあらわれた。吉向焼は須坂藩主・堀直格が弘化２（1845）年に江戸から吉向父子を招き、９年間にわたって焼かせたものである。窯は須坂市坂田の山麓に築かれ、吉向父子が嘉永６（1853）年に江戸へ帰った後は、弟子たちにより「須坂焼」として５年間焼かれた。結局、この窯業が藤沢窯を開く足がかりになった。

藤沢窯が築かれた奥山田地域は越後柏崎の椎谷藩に属し、その陣屋は上高井郡小布施町六川にあった。椎谷藩の年貢取り立ては厳しく、耕地の少ない住民は薪炭を小布施の六斎市にだし

たり、日滝原に出作りをしたりしていた。このような状況下で新たな収入をはかろうとする住民の願いが、地場産業を起させるきっかけになった。奥山田の根曲り竹を利用した竹細工、あい染の染物、地酒造り等が始まったのもこの頃である。藤沢焼もまた同じ状況を反映して創業されたといえる。

藤沢焼創業の直接の原因は、藤沢地籍で酒造業「藤田屋」を営なむ藤沢龍右衛門が、吉向焼に刺激されて土探しを始め、安政4年頃、奥山田北東の三沢山中腹で良質な三俣石を発見したことによる。むろん、窯業を始めるには莫大な資本も必要である。信州における陶磁器窯をみると、大部分が藩営窯で、民営窯はあまり育っていない。それは瀬戸地方のように陶土に恵まれないこともあるが、何といっても築窯、燃料、陶工等に莫大な費用を要し、とうてい民間で維持できる事業ではなかったことによる。

ところで、藤沢焼創業の中心人物であった藤沢龍右衛門（1836～1872）は、吉向父子が江戸へ帰った嘉永6年当時は17歳であった。その後、安政3（1856）年の龍右衛門が21歳の時、藤田屋の創始者であった祖父・藤沢辰右衛門（76歳）と叔父・藤沢藤兵衛（41歳）が相ついで病死し、実父・八百吉はすでに2歳の時に他界していたので、彼が家督を相続することになった。祖父の築いた奥山田随一の山林・田畑と酒造業一切の財産を相続した彼は、大庄屋として椎谷藩六川役所につかえたが、一方ではその財力をもって藤沢焼に傾倒していった。



史料2　藤沢龍右衛門家系図

したがって、藤沢焼の創業は龍右衛門が家督を相続した安政3年以降のことと考えるのが妥当である。また、藤沢焼製品の中に、「萬延歳製」と焼成年号を記したものがあり、「万延」の年には確実に窯業が行われていたことになる。「万延」は元年のみで、龍右衛門が24歳の年にあたる。いいかえれば、藤沢焼の創業は安政3年から万延元年の間と考えられるが、さらに、「万延歳製」銘の深皿の向付より古いと考えられる厚手作りの、花を中心にした線描向付があることから、創業は万延元年より1～2年以前の、安政5～6（1858～1859）年頃までさかのぼると推定される。

こうして、藤沢焼の創業にあたり、藤沢龍右衛門のもとに集まった協力者は、陶工の湯本角蔵（1834～1894）、沖右衛門窯の松本沖右衛門（1839～1906）、それに絵付を専門に行った絵師たちであった。

湯本角蔵は天保5（1834）年、小山村（現須坂市）の山岸八右衛門の長男として生れ、吉向の須坂滞在中に弟子として陶芸を学んだ。吉向が江戸へ帰った時は角蔵が19歳の年であった。

その後、藤沢龍右衛門に招かれ、藤沢焼に才能を発揮したが、廃窯後の明治3（1870）年に高山村水中の湯本長蔵の養子となり、高山村久保や水中で焼き物をしたが、資金に苦しみ、明治27（1894）年にこの地でなくなった。

松本沖右衛門は天保10（1839）年、高山村宮村の藤沢名右衛門の長男として生れ、湯本角蔵の片腕として藤沢焼に参画している。彼は宮村に沖右衛門窯を築き、主に藤沢焼の窯道具を焼いたが、藤沢窯廃窯後の明治8年に山田温泉の松本良右衛門の養子となり、事業に失敗して、明治39（1906）年に自殺した。

藤沢焼創業に深くかかわったこの3人は、当時いずれも20歳代前半の若さであり、角蔵は龍右衛門より2歳年上、沖右衛門は3歳年下であった。藤沢焼はまさにこの若さをもって、磁器という最も高度な技術産業の開発に挑戦したのである。三沢山に三俣石を掘りだし、これを原料にして焼いた藤沢焼は、幕末のひととき、奥山田の地に活況を呈したことと想像され、その情熱は高く評価される。

しかし、現存する藤沢焼の製品が極端に少ないことや、窯跡から多くの不良品が発見されていることなどを考えると、藤沢焼の生産が思うにまかせなかったことも事実であろう。このことは、藤沢焼が須坂焼の磁器とは一味違う、薄手の清水焼風で、かなり高い水準の磁器生産をねらったための、必然的な結果かもしれない。

また、ここで焼かれた藤沢焼製品は、村内はもとより、須坂・長野方面にまで販路を求めていたことは、伝世品や窯跡出土の磁器銘から知ることができる。村内においては、牧・関場・宮村・中山田等に個体で伝世品が散在しているが、これは龍右衛門が酒の小売りもしており、盆暮の景品に使われたためと思われる。

この藤沢焼の営窯期間は、窯跡の土の焼け広がり状態から、6～8年位と指摘されている。藤沢窯が廃窯された時期は詳らかでないが、窯主の藤沢龍右衛門が明治5年の夏に病没しているので、それ以前ということになる。また、陶工の湯本角蔵は明治3年に藤沢を離れ、水中に養子に入っているので、このことも大いに関係があろう。さらに、慶応2年4月16日に起った池の平での災害事故も、藤沢窯経営に大きな打撃を与えた。三俣石粉に混入する白土が入手困難になったため、廃窯に追いこまれたのかもしれない。これらのことを総合すると、藤沢窯廃窯の時期は、慶応2年の春頃から、龍右衛門が「今般藩制改革ニ付大庄屋廃止　依之扶持揚候事　辛未正月　椎谷藩庁」（藤沢勇氏蔵文書）として、椎谷藩御役御免になり、角蔵が藤沢を離れる前の、明治2年の間位と考えるのが妥当であろう。

藤沢龍右衛門の家系　初代藤沢辰右衛門が高山村宮村から出て、地酒「藤乃川」の醸造を始め、一代にして財をなす。76歳で病没後、孫の龍右衛門が相続し、家業の他に大庄屋をつとめる。学問を好み、近在の子弟に教えたという。龍右衛門の2人の異父兄弟のうち、東兵衛は山田温泉旅館「藤井荘」の祖、英七郎は醸造に従事、現藤田屋を継承する。明治4年をもって大庄屋が廃され、龍右衛門は翌明治5年8月、37歳で病死、子孫は現在須坂市に在住。

結　　語

藤沢窯跡の発掘調査について高山村教育長田中政義氏から相談をうけたのは、昭和55年のことであるから、もうかれこれ５年になる。近世陶磁器窯の調査経験も浅い筆者としては、とうていその任ではなかったが、湯倉洞窟の発掘調査等で村と長いかかわりがあったため、無下に看過しているわけにもいかず、急拠、調査経験の豊かな小林重義氏の協力を仰いだ次第である。したがって、藤沢窯の発掘調査は同氏の指導に負うところが大きい。しかし、何にもまして、この調査研究の主体になって終始努力をはらわれてきたのは松本信義氏であった。窯跡の発見に始まり保存に至るまで、多岐にわたる調査活動を続けられたなみなみならぬ情熱には語りつくせないものがあり、心から敬意を表すものである。藤沢窯の調査は、本文中に述べられているように、これで終ったわけではない。この報告書は発掘調査の成果と、今までの調査研究をまとめたもので、藤沢窯の工房址や関連遺跡については未確認のまま残されている。松本氏の一層の御精進を期待したいと思う。

ところで、近世陶磁器窯の発掘調査は、県内においてもいくつか行われているが、藤沢窯についてみれば、次のような点が特記されよう。

その１つは、藤沢窯が原料である三俣石に誘引されて成立したことである。一般に窯業は原料産出地に立地する場合が多いが、三俣石は搬出にかなり距離があり、必ずしも立地条件に恵まれていたとはいえない。また、三俣石そのものが良好な原料でありえたのかどうかは焼成実験の示すとおりである。

それにもかかわらず窯を開かせたのは何であったのだろう。それは当時の歴史的背景もさることながら、創業に大きなかかわりをもった３人の若者たちに負うところが大きかったといえる。陶器と異なる磁器に魅せられた若者たちが、おそらく一部には金持の道楽といったそしりをうけながら、もてる財力を藤沢窯に投入していった情熱は高く評価されなければならない。

それでは、彼等が目ざしたものは何か。単なる道楽であったのだろうか。藤沢焼の製品をみると、あるいは伊万里焼や清水焼に迫ろうとするかなり高度な技術が認められる。磁器成形に限らず、絵付も同様で、湯本角蔵を中心とする陶工たちの意気込みと芸術的高揚がうかがわれる。が、製品はいずれも急須、皿、茶碗等、生活に密着したものであり、いわゆる陶芸のための作品ではなかった。その点、藤沢窯が殖産興業的な目的をもって創業されたことは十分明らかである。ただ、その目ざすところは、日常雑器ではなく、玉露茶用急須等、かなり高級志向を対象としたものであったと考えられる。

いずれにしても、奥山田の地に５段の連房をそなえ、縦狭間を用いた末広がりの特徴的な窯を築き、短期間ではあったが磁器生産に挑んだ、藤沢龍右衛門、湯本角蔵、松本沖右衛門の生き様に深く感銘するのである。まとめとして、この点だけ強調しておきたい。

終りにあたり、発掘調査では地元の方々の積極的な参加がえられ、また、東北新幹線赤羽地区遺跡調査会の方々には、多忙なかたわら、かなり無理をして整理作業を進めていただいた。その他、特記しないが、多くの方々から御指導をいただいている。心から感謝の意を表す次第である。

参考文献

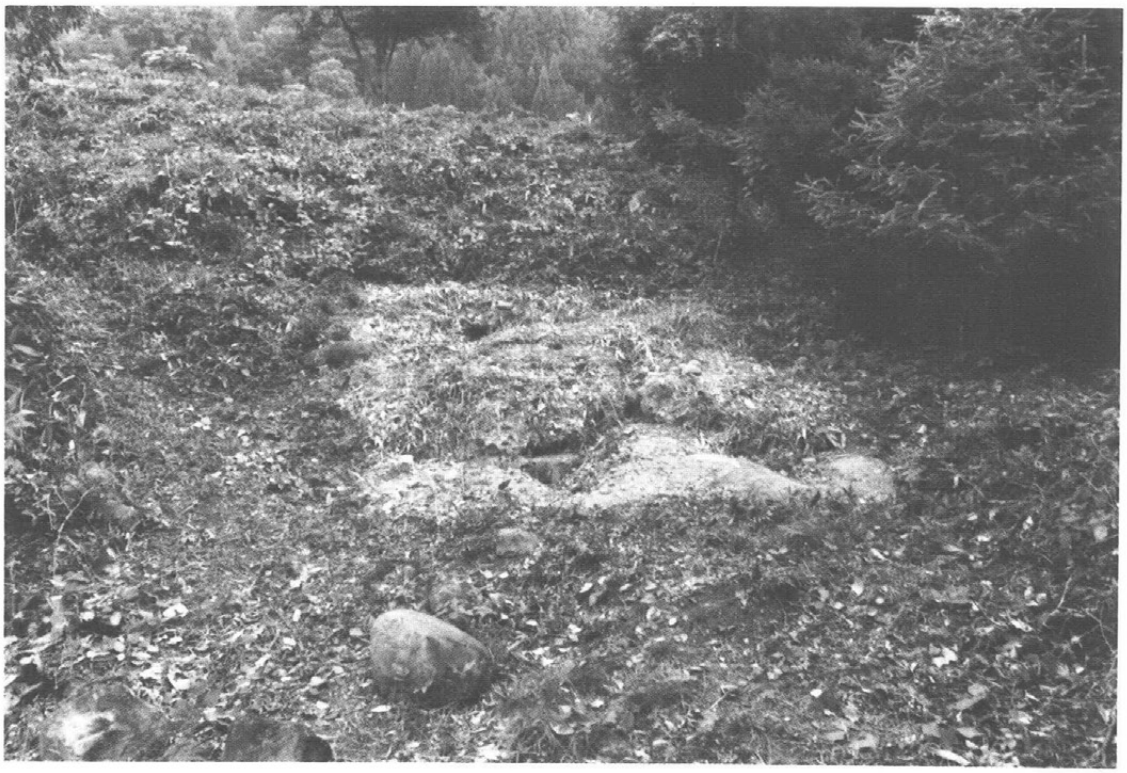
(1) 上高井歴史　１９１４　（勝山忠三）
(2) 信州の焼き物　１９７７　信濃毎日新聞社（安藤裕編）
(3) 藤沢焼について　1977～1981　①須高7 号②須高10号③須高13号（松本信義）
(4) しなのの陶磁器　１９８２　信濃毎日新聞社（安藤裕著）
(5) 日本やきもの集成２　１９８２　平凡社（著代表　楢崎彰一）

図　　版

全　景（対岸から）

1. 旧藤沢橋（吊り橋）

2. 松尾社祠



1. 発掘前の窯跡

2. 窯 跡 全 景

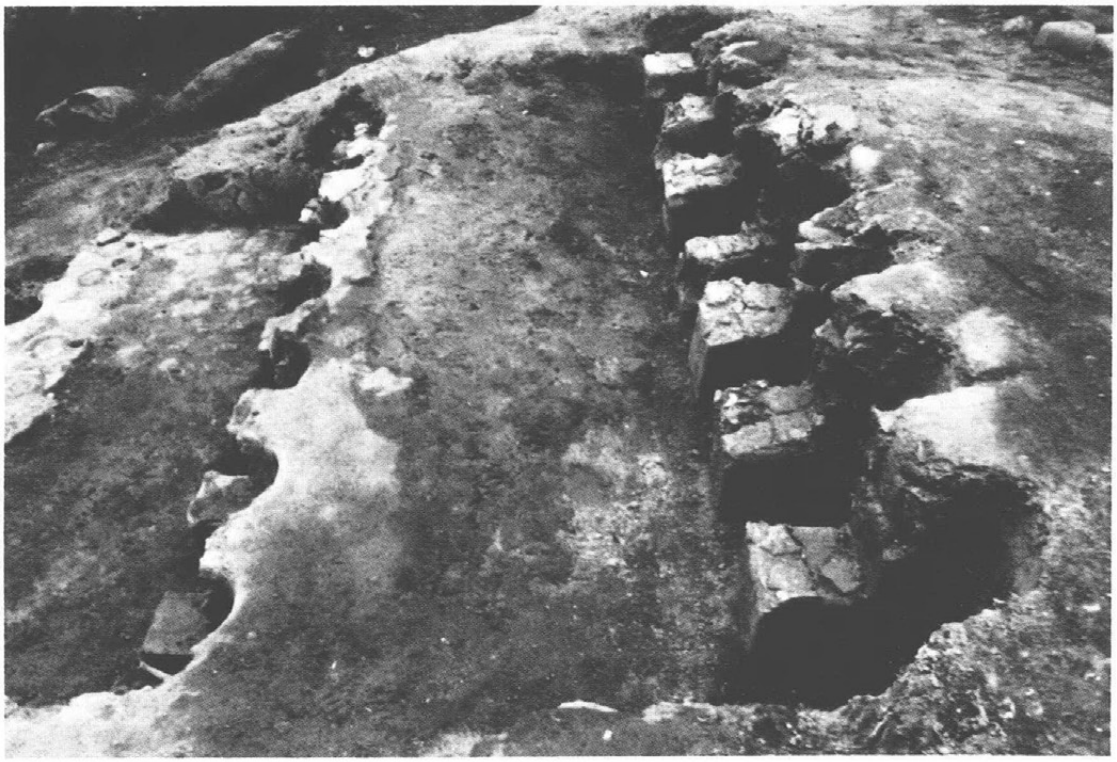
1. 灰　　原

2. 胴 木 の 間（焚き口）

1. 窯の縦狭間

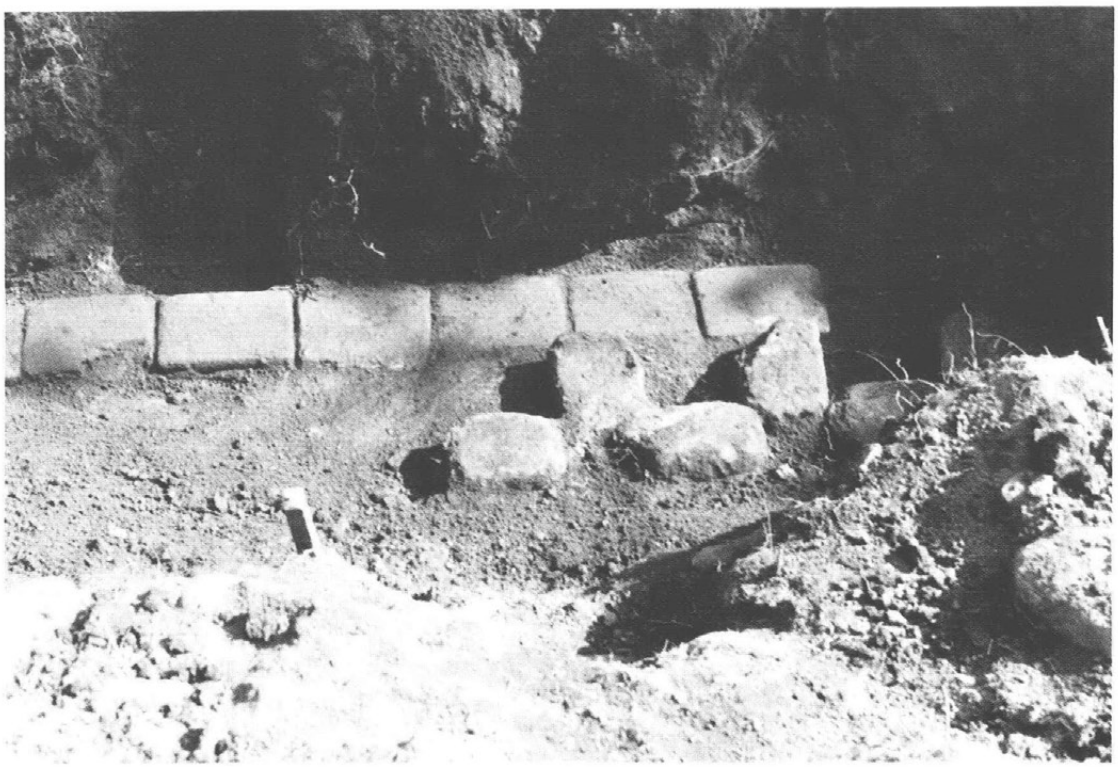
2. 第1焼成室（一房）

1. 第 2 焼成室（二房）

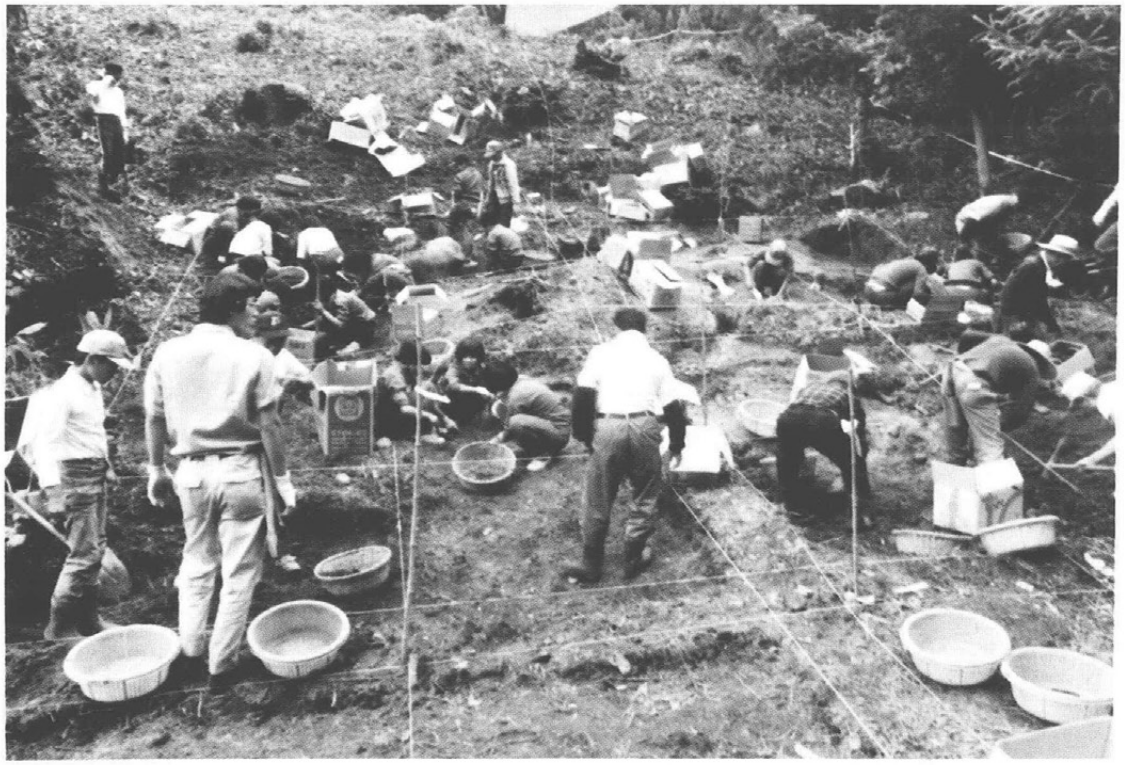


2. 第 3 焼成室（三房）

1. 第 4 焼 成 室（四房）

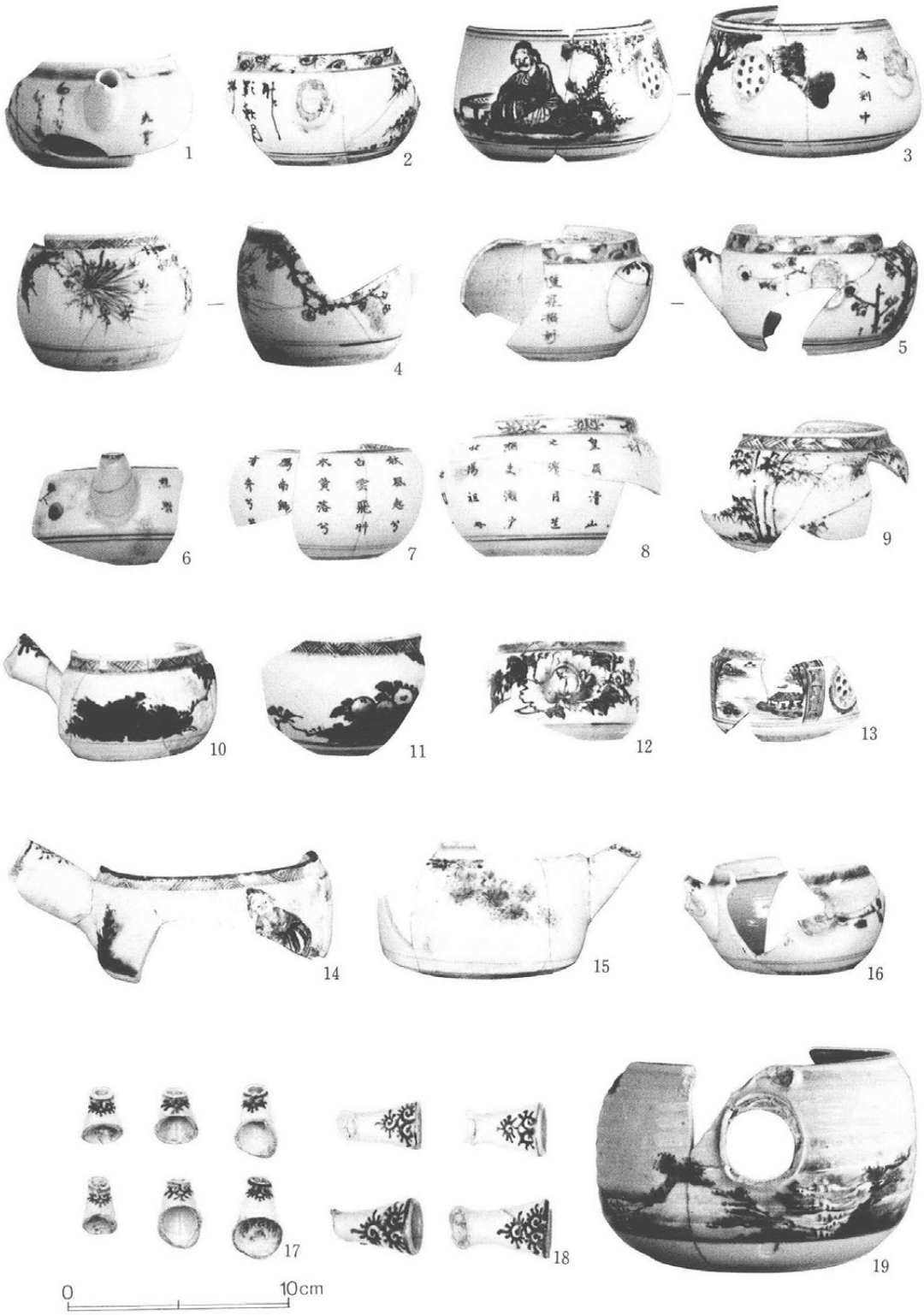


2. 第 5 焼成室上部（すて窯）

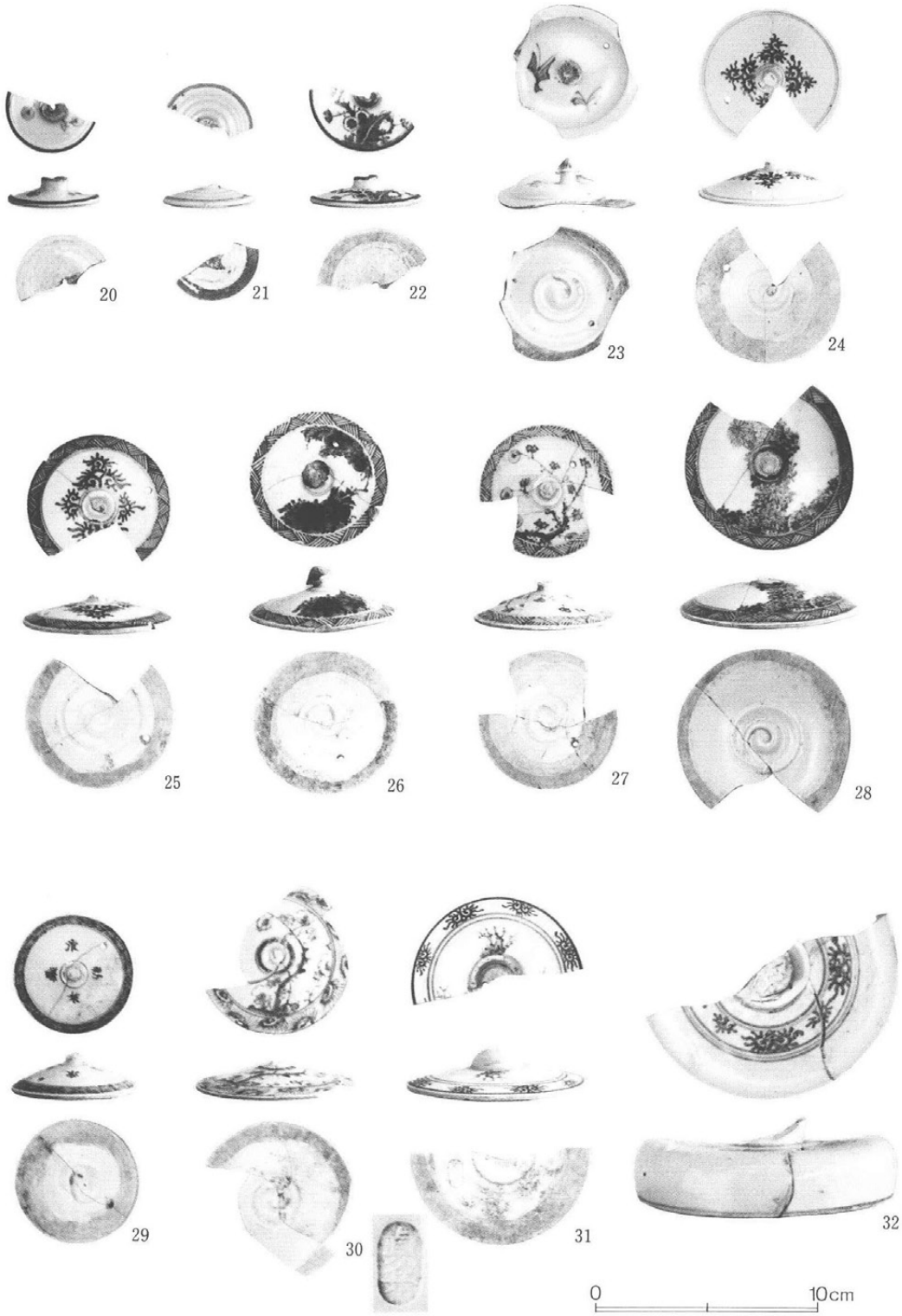


発掘スナップ（1）

発掘スナップ（2）

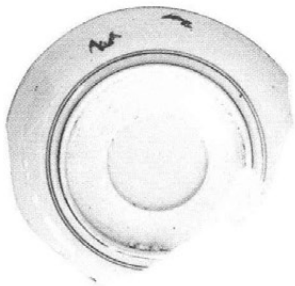


急須・土瓶



蓋

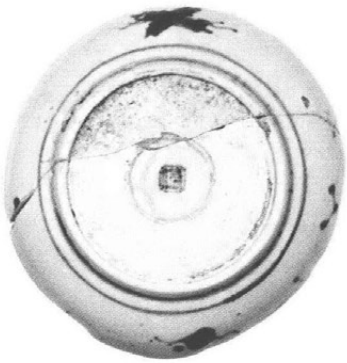
33



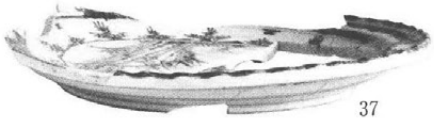
35

34

36



0 10cm



37

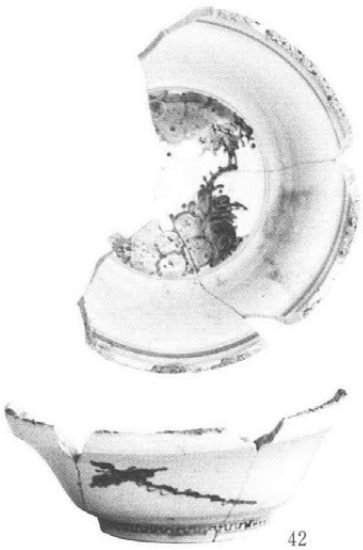
38

39

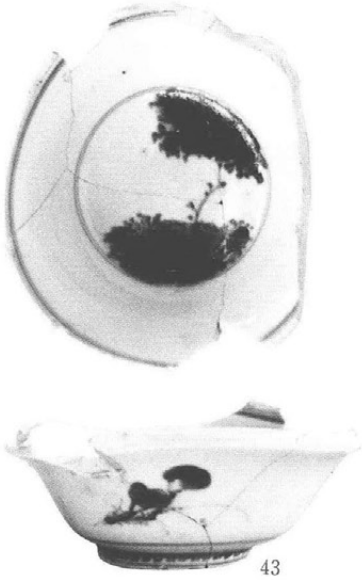
0 10cm

40

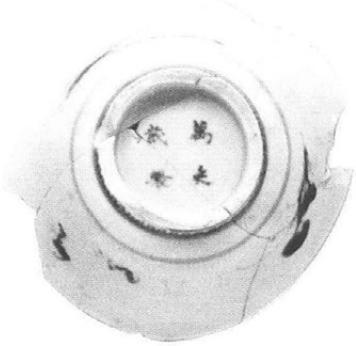
41



42



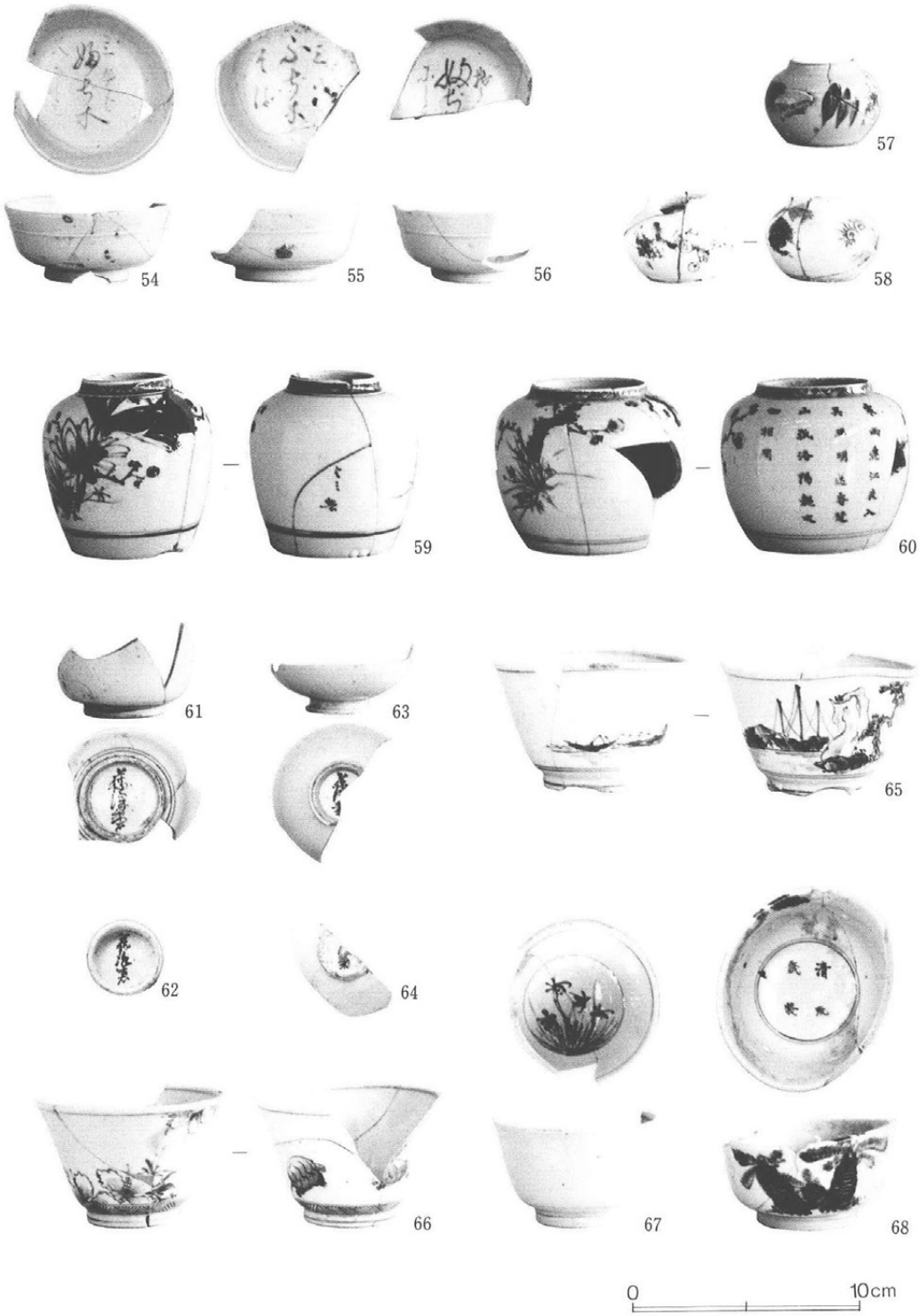
43



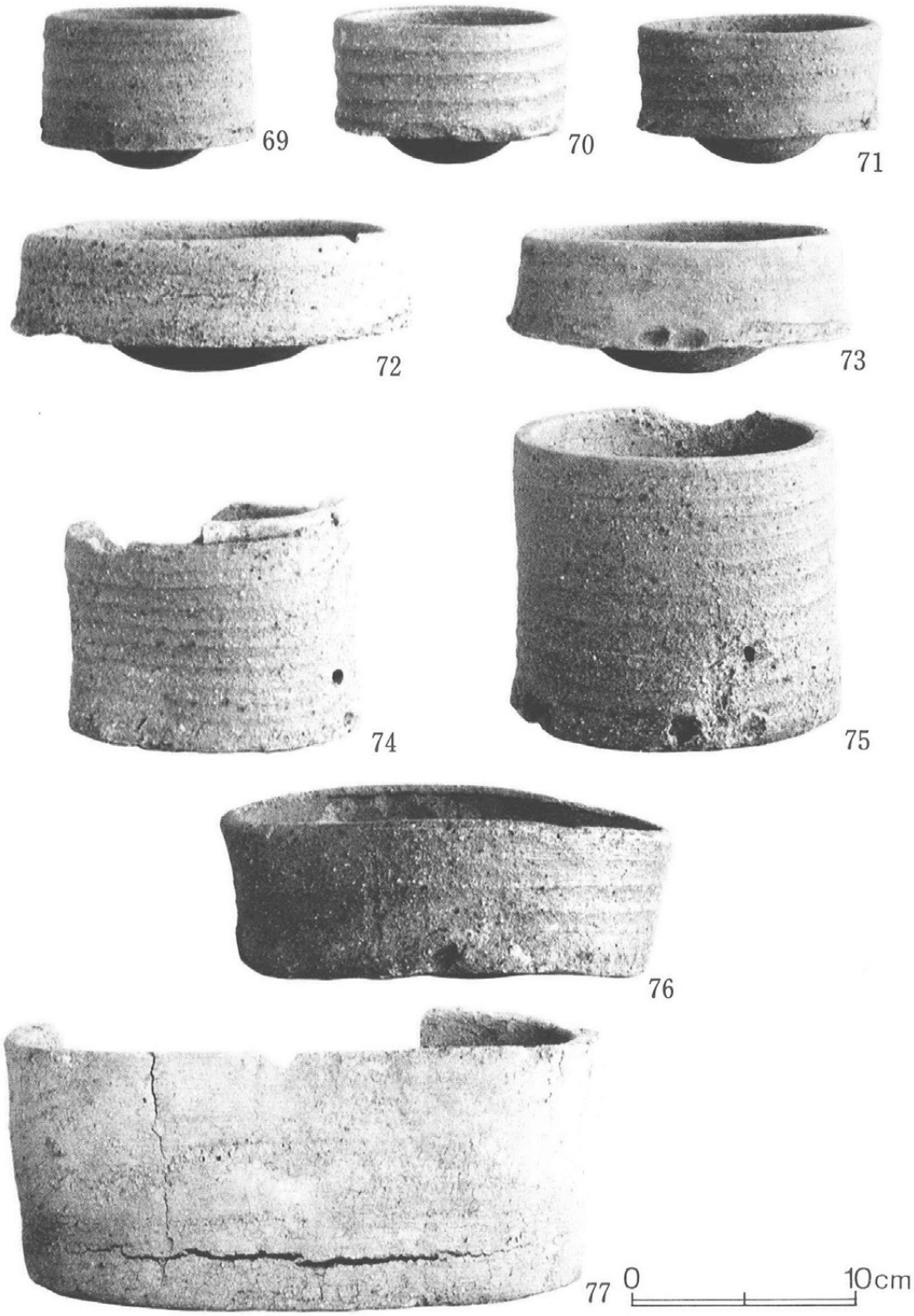
0 10cm

鉢

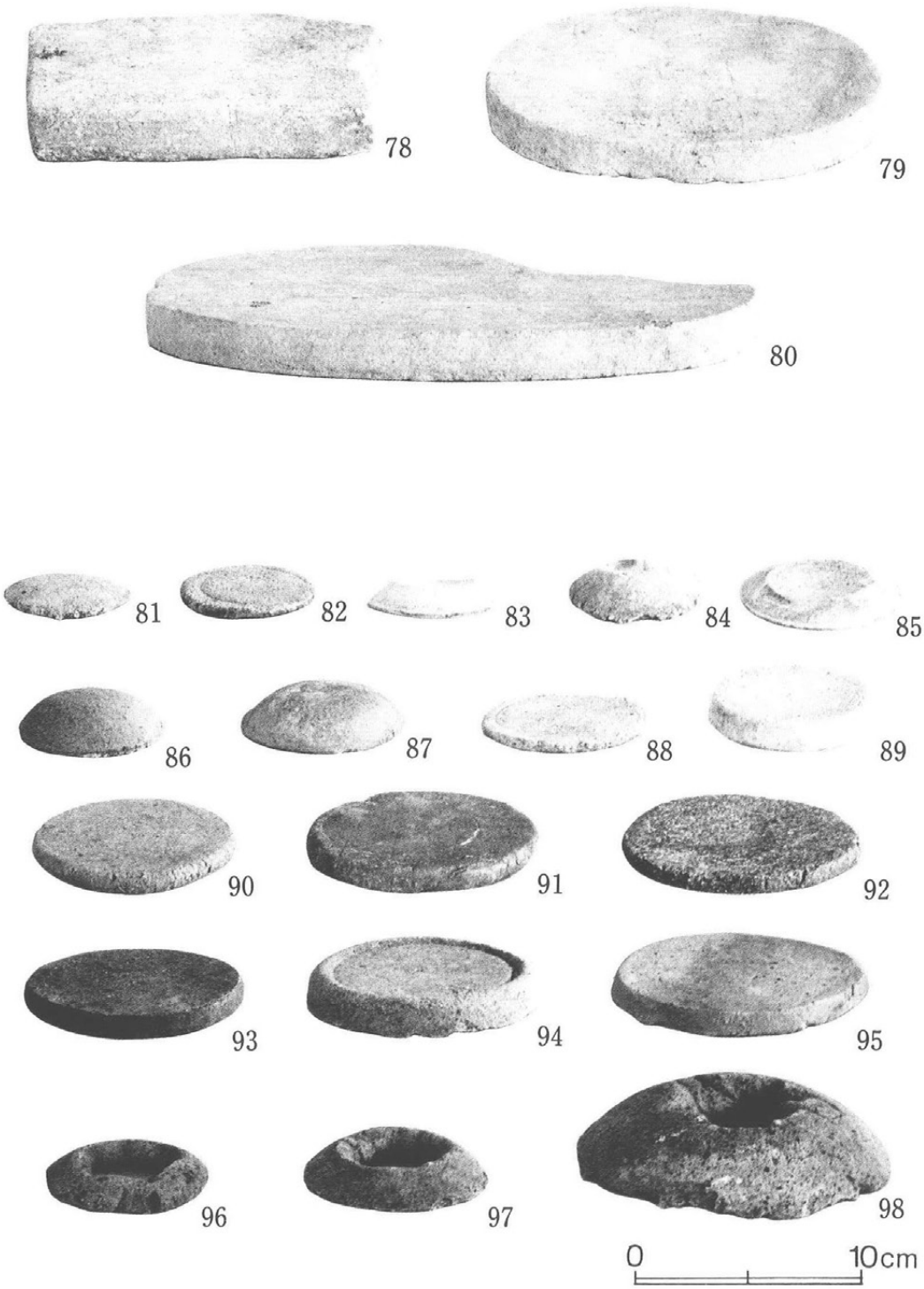
碗・花器



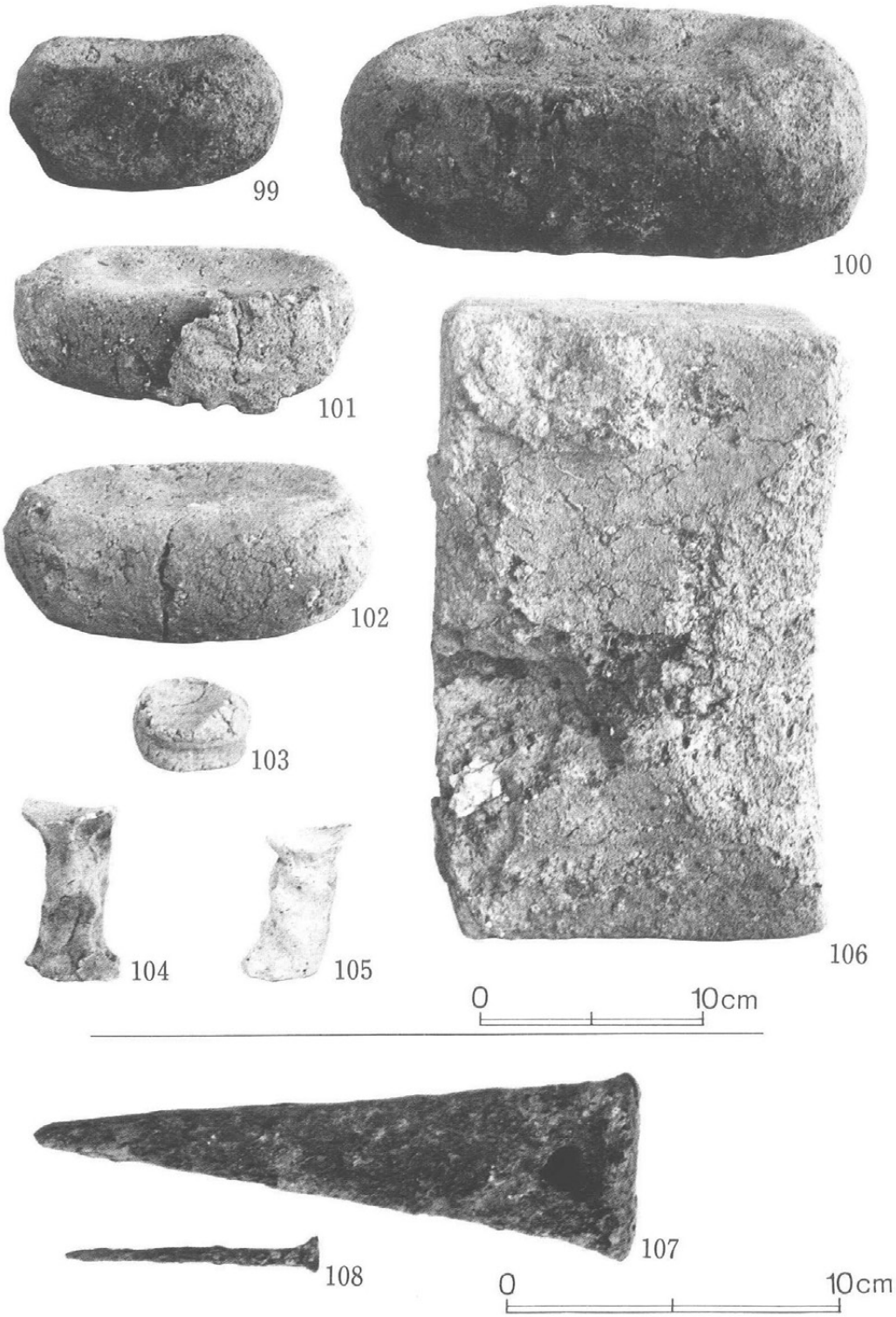
盃 ・ 茶 壺



窯　道　具



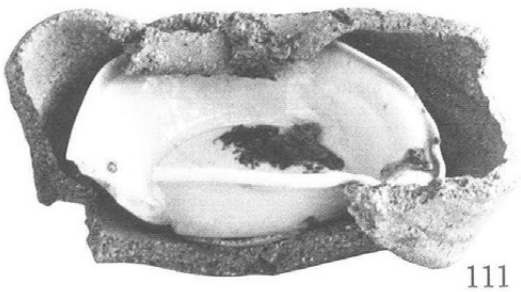
窯　道　具

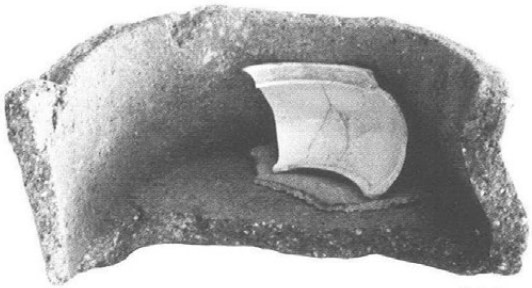


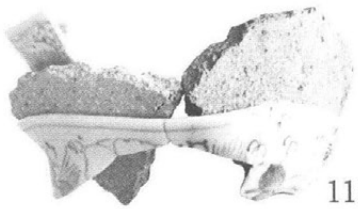
窯　　道　　具

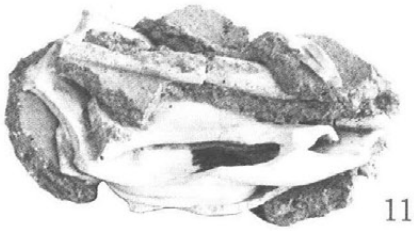
109

110

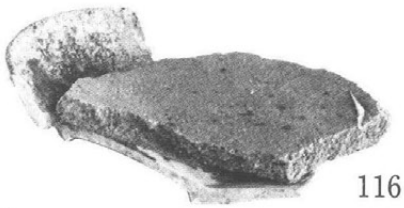

111


112


113


114

115


116

117

118

0 10cm

窯道具附着状態

藤　沢　窯　跡

長野県上高井郡高山村
藤沢窯跡発掘調査報告書

昭和60年3月20日　印刷
昭和60年3月30日　発行

編集　藤沢窯跡発掘調査団

発行　高山村教育委員会

印刷　北信オフセット印刷㈱
須坂市大字小山1918—501